
玉龍史

亥月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

玉龍史

【Nコード】

N3667G

【作者名】

亥月

【あらすじ】

六匹の【聖獣】が眠る地 【六大聖獣国】。世界の均衡が崩れ、平静を失ってゆく【六大聖獣国】を舞台に、世界の創造主「玉龍」の血を継ぐ【玉龍の巫女】と、「玉龍」を守護する「聖獣」の血を引く【玉龍士】達の戦記。

第一伝 【玉籠サマ】の神話（前書き）

大幅にリメイクしました。

第一伝 【玉龍サマ】の神話

「ねえ、長老サマ！ ビサリ長老サマ！」

「何かお話してよ！！」

鬱蒼と木々が茂った森の奥。

その森の開けた場所で、朽ちかけた切り株に腰かけ、ごつごつと節くれだった不細工な杖を持った老婆が、数人の子ども達に囲まれてしきりに話しかけられていた。ビサリと呼ばれたその老婆は、喉の奥から絞り出すような、けれどもけして、苦しそうには聞こえない声で愉快そうに笑った。皺だらけの顔には所々にしみが浮かび、老齡である事を今更ながらに感じさせる。

ビサリはひとしきり、子ども達一人一人の顔をヘーゼルの瞳でゆつくりと見回すと、またあの笑い方をした後に、杖を握ってごつごつと地面を叩いた。子ども達の顔が、嬉しそうに笑う。

「さあ……今日は何の話を知りたいのかい？」

「玉龍サマのお話！！」

子ども達は声を揃えて一齐に言うと、照れたように笑って、切り株の周りに思い思いの座り方で座った。ビサリはもう一度、ごつごつと杖で地面を叩いた。口には穏やかな笑みが漣のようにゆつくりと浮かんで、不思議に澄んだヘーゼルの瞳が、ゆつくりと瞼に閉ざされた後にまた開く。

「今日は……そうだね、もうすぐ現れるだろうよ……巫女と玉龍史の話をしようか」

ビサリは、時間の砂の奥深くに眠ってしまったそれを、自らの記

憶が覚えている限りにゆつくりとなぞり始めた。

昔々の話さ。お前達や、お前達の父さん母さんや、私でさえも、この世界に爪の欠片でさえも無かった時代。

私やお前達がこうやって過ごしている、六つの国が集まった大国、“六大聖獣国”も、まだまだ在りやしなかった。全ては、ある神サマから始まったのさ。

何にも無い場所に、その神サマは食べ物が実る大地を創った。その上に、翼馬ゼルフィンや鳥が飛ぶ空を創った。大地には、魚が泳ぐ川が流れて、お前達は見た事がないだろうけど、海が生まれたんだ。

神サマは全部を創った後に、自分が創ったところに生まれた、あの娘と恋をした。神サマと恋をしたんだよ、そこら辺の金持ちと結婚するより、ずっと幸せだ。

ただ娘は、神サマとの赤ちゃんを産んだ後に死んじゃった。そう、死んじゃったんだよ。人間は絶対にいつかは死んでしまう、娘も人間だったからね。

神サマは悲しんだ。悲しみのあまりに、自分が創った国を治める力まで、失くしかけてしまった。自分の子どもを守る力さえも、失くしかけていたんだ。神サマであったのに、まるで人間に近づいてしまったようになっちゃった。

また新たに、神の力を取り戻す為に、神サマは長い眠りにつづけた。

ただ守る力がなければ、“混沌”に吞まれて国は滅んでしまう。

お前達の知らない苦しさや悲しみが、まとまりも何も無い、本当に何もかもがごちゃごちゃになって、この国だけじゃない、世界を取り巻くんだ。

今も、世界の均衡が崩れようとしてるんだよ。全てのものが境界線を無くして、ほかのものと交わったり、元々一つだったものがいくつにも分裂しようとしている。

その“混沌”に立ち向かう為、神サマは眠りにつかれる前に、自分の子どもと、自分に仕えていた聖獣に力を授けられた。

ある者には風を、ある者には炎を、ある者には水を、ある者には雷を、ある者には氷を。そして子どもには、自分の“力”の源を。

何度も、この国は混沌に吞まれてきた。その度に、その一人と五匹の血を継ぐ者達は、その混沌を鎮めてきたのさ。それが、また繰り返されようとしている。

玉龍神（龍玉）の血を引く巫女と、聖獣の血を引く五人の玉龍士。

彼等は、混沌を恐れた玉龍神が生み出した。

【神の落とし子】なのさ。

ビサリはそう言い終わると、年季の入った古い絵本を閉じるかのように瞼を閉じて、こつこつと杖の先で地面を叩いた。子ども達は先ほどまで聞いていた話を小さな頭の中でなぞりながら、感慨深げに茶色や黒の瞳をくるくると回し始めた。ビサリはヘーゼルの瞳で、慈悲深い目線を子ども達一人一人に向けて、また杖の先で地面を打った。

それと同時に、栄養失調で色素が抜けかけている茶髪の髪の毛の少女が、痩せこけて、若木の枝のように細くなった腕を上げた。ビ

サリのヘーゼルの瞳が、ゆっくりとその少女を捉える。

「……何か言いたいのかい、リシャリー」

「ねえ……ビサリ長老サマ。巫女サマ達はさ、もう、このお国にいるのかなあ？」

リシャリーと呼ばれたその少女は、色素の薄い茶色の瞳に不安を浮かばせて、眉をよせた。他の子ども達も、彼女と同じように心配そうな表情を顔に浮かべた。まだ、悲しみや憎しみの涙が伝う事も無い雀斑そばかすだらけの頬。

ビサリは穏やかな微笑みを浮かべて、杖の先でがりがりと地面を掻いた。

「心配せずとも……もう巫女も、玉龍士も」

ビサリは、杖をゆっくりと空に向かって掲げた。子ども達の視線が杖の先に集中し、硬い地面に丸く削られたそれは、まっすぐに空を突く。

まだ、蒼く澄んだ空に溶け込む事のないその境界線は、くつきりと子ども達の瞳に映りこんだ。

ビサリはしばらくそうして、杖の先に子ども達の視線を集め続けると、やがておもむろに杖をある方向へと向けた。子ども達の視線も、導かれるように杖の先が指す方向を辿る。

「ほーら、こんなところに……」

「ビサリ様！！ やっと見つけた！」

ビサリの杖の先が指した場所に、一人の少女が立って、片手を腰に当ててビサリをきっと睨んでいた。一直線に腰近くまで伸びた淡

い栗色を帯びた綺麗な金髪が、木漏れ日をつけて時折きらりと光り、深く澄み渡った大きな瞳は蒼い。茶色や黒のみで統一された、子ども達やビサリの髪や瞳と違って、美しい色彩に彩られた彼女の髪と瞳は、森の陰に鋭く縁取られて一層映えていた。色白で、顔立ちは整っている。

大きな襟が背中の中分近くにまで下がった赤いジャケットを着て、丈の長い、丈夫な素材の純白のキュロットからは前後に赤い布が垂れ下がって、その布の両端を十分になめされた革のバンドが留められている。決して高価な生地で作られているわけでもなかったが、活動的なその格好は、活発な印象を与えてくれた。

ビサリはまた、あの笑い方で愉快そうに笑うと、こっん、と杖の先を地面に置いた。

「いるじゃあないか」

第二伝 神の御怒り

「はい？ 玉龍の巫女？」

木漏れ日が零れ落ちる森の中。

ビサリは、太く疎まほらに苔の生えた、ざらざらとした表皮の大木に凭もたれかかって、不細工でごつごつとした杖の先で地面を円を描くように掻いていた。そのビサリの前で、美妙に整った金色の眉を寄せた金髪の少女は、眉の下の蒼い大粒の宝石のような瞳をぐりぐりと回しながら、困惑したような表情を浮かべたまま、おもむろに片手を腰に当てた。

「まさか……あんなの、作り話でしょう？」

「さあねえ……」

ビサリは穏やかな微笑を口元に張り付けたままで、描いた円の中央をこつこつ、と叩き、ゆっくりと顔を上げた。しみや皺が浮かんだ老いさらばえた顔の、ヘーゼルの瞳が何かを探るようにぐりぐりと動く。

「ユイ……お前が、信じる信じないはお前の自由さ」

「分かってます。私が言いたいのは……」

「何故、私がお前を【玉龍の巫女】だと断言したのか、という事かい？」

ビサリがそう言って瞳を閉じると、金髪の少女 ユイは不服そうに前髪を揺らすと、深く溜め息をついた。とんとん、と焦げ茶色のブーツの先で地面を蹴りながら、左の側頭部を抑える。

「……そうです」

「何もそう、深く考える事じゃないのさ」

ビサリはまた、あの笑い方で愉快そうに笑った後、ユイの瞳を捉えた。動くともないヘーゼルの瞳は、それでも微妙に揺れ動く。まるで、誰も読み、透かす事のできない、ビサリ自身の心のように。ユイは揺れ動くその瞳をうまく捉えられずに、側頭部に当てた左手で頭を搔いた。

「あくまでも私の直感なんだよ。あくまでもの話だがねえ……」

ビサリは重い割にはよく動く唇を動かしながら、またヘーゼルの瞳をすつと閉じた。そのまま、ごつごつした杖の先でまた地面を搔く。自分という意識の中で象られたそれを、ゆっくり本の背表紙でもなぞるような要領で。

「ごつやって、眼を閉じれば……浮かんでくるのさ」

ビサリはそう呟くと、眼を閉じたまま、杖の先で何らかの意思を込めた文字を刻み始めた。硬質な音を立てながら、乾いた地面に刻まれてゆく文字を辿るユイの蒼い瞳が、僅かに見開く。

【 “日輪 大海に 御身を染められし者

地、砕け 天、崩れ 万物の個が乱れ 掻き消える 時 越えて

その御志 聖獣の土と共に。

その者、【玉龍の巫女】とあり”】

最後の一文字を書き終わると、ビサリはごつごつ、と一つ一つの

文字を叩いた。地面に浅く刻みつけられた文字をヘーゼルの瞳はゆつくりと捉え続け、最初に書かれた場所でゆつくりと止まった。

「日輪の髪に、大海の瞳。【玉龍一族】の中でも、「純血」にのみ表わされる証さ。今じゃ「純血」は数が少ない、希少価値はほとんど跳ね上がってきてる。彼等の間じゃ、親族以外で「純血」はいないからねえ……血が濃くなりすぎちまうのさ」

「だからって、何で私が……」

ユイがそう言いかけると、ビスリはおもむろに顔を上げた。木漏れ日を受けて、時折金色に光るヘーゼルの瞳は、混沌を待ち受けるかのようにどっしりと眼窩がんかに嵌まって、彼女を見据えた。

「代々、巫女は血から血へと繋がっている。一代一代が、何の繋がりも無い玉龍士とは違うのさ。私はお前の祖母を知らない。知るという事は「絶望」に近いという事だ」

「母さんは……純血じゃなかった」

ユイがぼつりと呟くと、ビスリは白くなり、微かに茶色の毛が混じった眉を両方持ち上げた。薄い唇に穏やかな笑みが広がり、ヘーゼルの瞳が細まる。

「もう……歯車は回ってるんだ。お前が巫女であるか否かは、その歯車の一つが欠けたか欠けぬかで決まるのさ……」

「……けど、私は……」

ユイが言い終わらない内に、怒声と悲鳴が静寂を突き破った。

「何……!?!」

ビサリは、いつもの緩慢な動きを打ち捨てた迅速な動きで立ち上がると、杖をつきながら東の方へと走り出した。ユイも後を追って、木の根が這う、でこぼことした地面を駆ける。

しばらく走り続けて、やっと木々が開けてくると、眼下には、屈強な十三、四人の大男達が村を襲っているのがはっきりと見えた。あちこちで煙が上がり、子ども達が泣き喚きながら乾いた地面の上を逃げ回っている。ただでさえ若い男が少なく、女子どもや老人しかいない村は、今や壊滅状態となっていた。逃げ遅れた子どもも小さな背中がぱっくりと裂かれ、どろどろとした血溜りに膝をついて、その子の母親が気が違ったように泣き叫んでいる。薄汚い身なりをした、不潔な大男は無骨な斧で、今度はその母親の首を切り落とした。首が宙を飛び、それを見た他の子ども達は蒼ざめた顔で、恐怖の声を高く上げた。

痩せこけ、もはや皮と骨だけになったといってもよい程の老人が、孫であるう可愛らしい女の子を庇うように抱きすくめ、命乞いをするのが見える。変色した髪を荒縄で無造作に縛りつけた、胸板の厚い男は、老人を蹴り倒して、女の子の襟首を掴んで肩に下げた。後で遊郭か子ども好みの金持ちに売り飛ばす気なのだろう、他の男達も女の子を肩に担いでいる。

「何なの、あいつ等……!」

ユイは、強く握りしめた拳を怒りに震わせた。激しく燃える憤りの炎が浮かぶ、蒼い瞳は、大男達をはつきりと映し出す。ビサリも、杖を握りしめて、静かな怒りに燃えるヘーゼルの瞳を細めた。

二人は足早に斜面を駆け下りて、死と恐怖が「混沌」と入り混じ

った、自分達の村に向かった。

「離してええ！ その子を返してええええ！」

頬に絶望の涙を伝わせながら、一人の母親が男の足に縋^{すが}って、乱暴に取り上げられた我が子に必死に手を伸ばした。真っ黒な瞳から母親と同じように絶望の涙を流す、小さな女の子も必死に手を伸ばすが、男は残酷な笑みを浮かべて、母親の鳩尾を蹴り飛ばした。吹き飛ばされた母親の身体は、びくびくと小さく痙攣した後に、ぴたりと動かなくなってしまうた。

「おかああああああん！！」

喉を震わせて絶叫する子どもを、肩越しに振り返って男はにやりといやらしく笑った。

「お前のおかーさんは、痩せつぽちだな！！ 胸もありやしねえ、そんなんでよくお前を育てられたもんだぜ！ ははははは！！」

男が高らかに笑ったと思うと、一瞬の内に子どもが肩から消え失せた。

そして、呆気にとられたような男の胸に人影が滑り込んだかと思うと、次の瞬間には遠くまで吹き飛ばされていた。自分が蹴飛ばした、子どもの母親のように無残に。

「あんたみたいにな奴に笑われる胸なんざ、最初っから持ち合わせてないわよ」

泣き絶る子どもの頭を抱き寄せ、髪紐で髪を纏めたユイが、鬼もすくんでしまいうぐらいの眼光を光らせた。固く握りしめられた右の拳は赤黒く変色し、左手には、長さ百二十セーレル弱の片刃の剣が握られている。

男達は目を剥いたが、ユイを見るなり、またいやらしい笑いを浮かべた。男達はそれぞれの獲物を肩や背に担ぎ、ぞろぞろとユイの目前に集まり始めた。総勢、十五人程度。中央には一際背の高い、巨大な両刃の剣を帯刀した大男が腕を組み、品定めするようにじろじろとユイを見つめる。

「クク……こんな辺鄙な村に、こんな上玉がいるとは思わなかったぞえ？ おまけに「玉龍族」の純血ときてる。ツイてるツイてる、こんなにツイてんのは久しぶりだな」

リーダーのようなその男が、ふざけたようにそう言うと、他の男達も下品な大声を立ててげらげらと哄笑した。ユイの蒼い瞳がすと冷めて、金色に光る眉が微かに動く。

大きくしゃくり上げる子どもの、ふわふわとした茶色い頭に、ユイはそつと手を置いた。ゆつくりとその子が顔を上げると、悲しみと憎しみの涙でべとべとになった頬に、そつとユイの白くしなやかな指が触れる。その動作はひどく慈しみの感情に溢れて、子どもに今は亡き母親を思い出させた。色は違えども、先程の憎しみの眼光とはかけ離れた、たおやかで優しいその瞳はおもむろに子どもの瞳を捉え、頬に触れた指は頬を撫でてくれる。子どもの瞳からは、【悲しみ】の涙が溢れた。【憎しみ】を微塵も感じさせる事の無い、ただ、殺された母親を想う感情の込もったその涙は、【憎しみ】の混じった涙を洗い流し、浄化するように次から次へと頬を伝い、乾き切った地面に落ちていった。

「ピサリサマの所へお行き。玉龍サマの御加護がお待ちなさってる。

早く行かなきゃ」

ユイは子どもを右手で引き寄せると、さらさらと額に落ちる髪を掻きあげて、その額にそつと口づけた。ユイの唇が離れると、子どもは微かに、けれども力強く頷くと、足早に森の中へと走っていった。ユイは、その後ろ姿を見えなくなるまで見送ると、剣の柄をぐつと握り締めて、男達をきつと睨みつけた。

リーダーの男は口笛を吹くと、鞘をつけたままの剣先で、自分のばかりに広い額をつついた。

「ませた真似をするじゃねーか、中々気に入ったぜえ」

「俺にもしてくれ、ってか」

後方に固まった他の男がはやしたてるようにそう言うと、男達は、また下品な笑いを響かせた。後方で笑う男達の真ん中で、リーダーの男は、欲望に薄汚れた笑みを浮かべて、鞘から剣を引き抜いた。まともに手入れもされていない表面は、泥や赤黒い血に塗れ、刀身はじくじく刃^は毀れ^はれている。

「変態共に売るのは勿体ねえな、可愛がって、ずたずたにしてやるよ!!」

リーダーの男がそう叫ぶと、他の男達も一斉に声を上げて、それぞれの武器を構えてユイの方へと向かってきた。ユイはそれでも動じずに、鋭く氷のように光る眼光を射抜くように男達に向けると、最初に向かってきた一人の男の方へと疾風の如く突っ込んだ。

意表を突かれたユイの行動に、男は驚いて自分の斧を懐^{ふところ}に突っ込んだ。が、即座に股の間からすり抜けたユイは、もう次の男に斬りかかっていく。

「うござああつー!!」
「うぎやああつー!!」

二人の男を瞬殺したユイは、そのまま姿勢を低く保ってリーダーの方へと駆け抜けていく。リーダーは余裕だと言いたげな顔で顎をしゃくった。五人程度の男が斧や長槍を構えて、襲いかかってくる。最初に髪を刈り上げた二人の男が同時に、ユイの腰を吹き飛ばそうと、無数の針が突出した棍棒を両側から挟み打ちで殴りかかってくる。風の動きがぐにやりと歪んで、二対の棍棒が腰を吹き飛ばす直前に、ユイは高く跳躍して、棍棒の上に着地した。男達がそれに反応する前に、強烈な蹴りを両方の顔に見舞うと、便乗して向かってきた三人の男の長槍を、一本は剣で叩き落とし、二本は踵落としを食らわけて折り曲げた。

そのまま、武器を失った一人の男の顔面に鋭いハイキックを食らわせ、二人の鳩尾に重い突きをかます。一斉に十五人中、七人を殺害または気絶させたユイは、熱り立ったようにリーダー格を睨んだ。リーダーは高く口笛を吹くと、一足前に出て、剣を構えた。凶悪な笑みが広がり、臙脂色の瞳に狂気が宿る。

「いいカンジだ……楽しめそうだな!!」

リーダーは高らかに笑うと、両刃の剣を構えてユイに斬りかかった。とつさに剣を自分の前にかざしたユイの細い手首に、鈍重極まる衝撃が走る。電気が腕を一瞬走ったような感覚に襲われ、よろよろと剣を下ろした隙に、リーダーの男は鋭敏な動きでユイの背後に回って髪を掴んだ。髪を強く引っ張られて、鋭い痛みが走る。

「……見た事ねーなあ、染め具で染められたみてーな安っぽい色じやねー。こういうのを高貴シャルラっつーんだろうな、黄金リセリアンと見比べても劣らねーぜ」

リーダーは、自分自身に説明するように朗々と語り終わると、ユイの小さい顔を引き寄せて耳打ちした。

「悪いなあ、女のガキにしては快進撃だったぜい？　だがよ、必要以上に出しゃばるのはよくねーんだ。悪いな、他のガキも頂いてくぜ」

そう言い終わると、リーダーの男は、生臭い血に塗れた左手でがつとユイの服を掴んだ。蒼い瞳が、恐怖で冷めていく。

「そこら辺の盗賊はな、気に入った奴を見かけたらすぐにやってんだよ。いつ、たまるか分かったもんじゃねーからなあ……」

ジャケットを剥ぎ取られたユイは必死に抵抗して、踵を思い切り脛に打ちつけた。リーダーの男は苦痛の声を漏らして、手を離れた。すぐに体制を立て直してユイの足元をすくった。乾いた地面に頬を擦りむいたユイの顎に手を当てて、男は顔を近づけた。饅えた匂いが鼻につく。

「別嬪が台無しだなあ……まあ、いや。ガキにはデコちんだったけど、俺は口じゃなきゃ収まんねーぜ？」

男はにやりと歪んだ笑いを浮かべると、ユイにゆっくりと顔を近づけた。ぎりり、と齒軋りする音が自分でも嫌というほど聞こえて、ユイは左手に握った剣の柄を握りしめた。

(……………れか助けて！)

地面が轟いた。

「ビサリサマ!!」

「地面が揺れてるよおお!!」

木漏れ日が落ちる森の中で、ビサリの張った、透明の半球状の結界^{ディン}の中の子ども達が、突然の地震に驚いてビサリにしがみついていた。ビサリも子ども達を抱きかかえて俯いていたが、突然何かを感じ取ったように顔を跳ね上げた。子ども達もビサリを見て、おそろおそろ空を見上げる。

木々が広げる枝の隙間からは、異様な光景が覗いていた。

「ねえ……ビサリサマ!!」

「龍が……金色の龍が、降りてきてるよおお!!」

「玉龍サマだ! 玉龍サマだよね!!」

太陽の光が一際強く突き抜けた、光の柱。
その中を、金色に光る龍が、雅^{みやび}に優雅な身体をくねらせて。

地上へと、舞い降りていく。

ビサリは、ヘーゼルの瞳を見開いて、何かに強く惹きつけられるかのようにおもむろに立ち上がった。子ども達もビサリと同じよう

にして立ち上がると、その、神聖エリザナに彩られた光景を、呆けたように見つめた。

ビサリは空を見上げたまま、子ども達を自分の元へと引き寄せた。その表情は、険しく、天から舞い降りた【玉龍】を見据えている。

「お前達……よく見ているんだ。前に、私の言った事を覚えているかい？」

子ども達はビサリの顔を見上げて、首を横に振った。皆、涙は乾き切り、少し湿った筋だけが残っている。

「【玉龍さま】の御怒りは、龍族の怒り。巫女の御怒りは【玉龍さま】の御怒り」

「……巫女さまが怒れば、【玉龍さま】も怒っちゃうって事？」

純粹で、まっすぐな幼い瞳を、ビサリはヘーゼルの瞳で瞬時に捉えた。

「そついつ事々」

ビサリは短く言うと、子ども達を自分の周りに集めた。微かな揺れに収まったかと思っただ地震は、また勢いを取り戻し始めた。木々が揺れ、葉と葉が激しく擦れ合う。枝がばらばらと落ち、結界ガーデンの上にも振り落ちてくる。

座り込んでしまった子ども達をかくまうようにして抱き寄せると、ビサリはまっすぐ天を見上げた。

空は、様々な形の龍が飛び交い、どれも同じ方向を目指して羽ばたいている。

【玉龍】が、近隣の龍族を呼び寄せているのだ。

「お前達……よく見ておくんだ」

子ども達は、ビスサリの言葉に薄目を開けた。

「……これが、神の御怒りさ！」

「何だ!？」

リーダーの男は、突然の地震に驚いて即座に跳ね起きた。ユイは呆然として、空を見上げた。金色に光る優麗な身体をくねらせて、巨大な龍が、地上へと降りようとしている。光の柱の中を舞い降りるその姿は、まさに神と呼ぶべきものだった。

「……何だ!？ 何が起こっていやがる!？」

リーダーの男は明らかに動揺したように、辺りを見回している。ユイは右手を、そつと唇に触れた。間一髪のところで奪われる事の無かったその唇を確かめてから、深い安堵のため息をついた。と、その時。

「きゅ〜っつ!」

突然、肩越しに甲高い鳴き声が聞こえて、ユイはさつと振り返った。

くりくりとした瑠璃色の大きな瞳。汚れ一つ無い純白の鱗。華奢で、けれどもとても力強い翼。細い首には、雪の結晶を象った水晶の飾りを通した、白銀色の鎖が幾重にも巻かれている。

有翼シルヴァーの龍の、幼生だった。ユイの肩に止まって、人懐っこそうなその瞳をくりくりと回して、ユイの血の滲んだ頬をピンク色の舌で優しく舐める。

きゅうう、きゅうういつ、と可愛い鳴き声を上げながら、すべすべとした鱗に包まれた顔を嬉しそうにすり寄せる有翼シルヴァーの子どもに、ユイは優しく手を触れた。

そして、次の瞬間。

「うわああっ！！」

リーダーの男の悲鳴の後に、瞬時に強烈な風が吹き荒んだ。リーダーの男は高く吹き飛ばされ、ユイは咄嗟に目を閉じた。風はユイの髪を戦そよがせ、こんな強風の中でもユイの肩にしっかりとしがみついた、有翼シルヴァーの子どもは、きゅうう！ とはしゃぐように声を上げる。

風が止み、巻き上げられた砂塵が落ち着いた頃、ユイはゆっくりと目を開けた。が、開いた後になって、自分の目を疑った。

巨大な身体を直径二十センチ程もある蒼い鱗に覆われた、赤銅色の瞳を光らせた、有翼シルヴァーの成体が、太い首を擡もたげてユイを見下ろしていた。少し黄色を帯びた、鋭く光る牙が、強大な威圧感を与える。恐怖で身体を硬直させたユイの華奢な肩で、有翼シルヴァーの子どもは、はしやぐようにきゅい、きゅい、と鳴き声を上げた。

その鳴き声に反応するかのようには、成体の龍はゆっくりと巨大な頭をユイの方へと降ろした。低い唸るような声が鼓膜に響き、時折きらりと光る鋭い牙に、肉片らしきものが見え隠れするのを見て、ユイは座り込んだまま後ずさりした。成体の龍は、赤銅色の瞳でゆっくりとユイを捉えた。その瞳はやけに静かで、敬愛し、崇拜する者を見つめているように、ゆっくりと細まる。

(……サマ)

「え？」

頭の中に、澄んだ声が響いた。鼓膜から響いている訳ではない、頭の中そのものに響く声。それは、波紋が広がっていくように身体中に沁み込んで、不思議な感慨に浸らせた。

有翼の子どもは、きゆうい、と促すように一声鳴いた。返事をしたら？ といいた気に。

(……マ、巫女サマ……)

「きゅい、きゆうい、きゆうい」

澄んだ声が響き渡ると、有翼の子どもはユイの耳元で喚いた。まだ分からないのか？ と言いたいのか、小さな翼でぺしぺし、と耳を叩く。

(……ぎよ……玉龍の……娘サマ)

「娘サマ？」

ユイは驚いたように立ち上がった。有翼の成体は、澄んだ赤銅色の瞳をぐるりと回して、低く唸った。細かな髭がふるふると震えて、周りの空気も揺れる。いつの間にか地震は収まり、天には光の柱のみが残っている。

だが、いまだに他の有翼の龍が、翼を広げて飛び交っている。どうやら、先程の地震は、無翼の龍達が集まる“足音”だったようだ。

「……どういう事？ 何故……私が玉龍サマの娘なの？」

有翼の成体は微かに目を細めると、またゆっくりと首を上げた。きゅい……と、有翼の子どもは静かに鳴いた。

「..の事いひこひに.....」

第二伝 神の御怒り（後書き）

セーレル＝メートル、メビン＝センチです。

第三伝 大いなる意志の齒車

「ねえ………どういう事なの？」

ユイは、また首を下げた有翼シルヴァーの成体の前に立って、不安げな表情でそつと、その鼻先に触れた。大きな皿のように平べったく、つるつるしている蒼い鱗をユイの細くしなやかな指が撫でると、有翼シルヴァーの成体は低く鳴きながら、赤銅色の瞳を細めた。

有翼シルヴァーの子どもも、瑠璃色の瞳をくりつ、くりつと回しながら、きゅーいきゅいきゅい、と立て続けに鳴く。恐怖は不思議と消えてなくなり、後に残ったものは、今までに感じた事のない「親密感」だった。家族である母親と過ごす時間の少なかつたユイにとっては、それはとても懐かしく、心の片隅で硬く凍っていた氷シユナミが溶けていくようにも感じられた。

(娘サマ………貴方様は、何も知らないの………ですね)

今度は、とてもはつきりと。まるで、澄んだ水に落ちた、一滴の血の滴のように。有翼シルヴァーの成体の「声」は、ユイの意識の中に響いてゆっくりと長い時間をかけて、その奥底に染み込んでゆく。穏やかな赤銅色の瞳は水面がたゆたうように揺れて、ユイの蒼い瞳を覗き込んだ。きゅい………と、気遣うように有翼シルヴァーの子どもが、耳を甘噛みする。

「その通りよ………私は何も知らないの」

(娘サマ………いいえ、巫女サマ)

有翼シルヴァーの成体はきつぱりと言つと、また、その長い首を持ち上げた。きゅいっ！ と有翼シルヴァーの子どもは高い声で鳴くと、小さな翼を思い

切り広げて、ぱたぱたと羽ばたかせた。ユイの金色の髪が、その風に吹かれてさらさらと靡く。

(けれど……私の口から言うのは……荷が重すぎる)

「きゅーい……きゅーい」

シルヴァー有翼の子どもは静かに鳴くと、白銀色の鎖が巻きついた首を伸ばして、ユイの顔を覗き込んだ。くりくりと動く瑠璃色の瞳が、ただ真っ直ぐと、蒼い瞳を捉える。

「何で……何故なの？」

「ユイ」

シルヴァー縊るように有翼の成体に呼びかけるユイを、制する声が響いた。

少ししわがれて、けれども艶やかな、人に強く感じさせる何かを秘めた声。

紛いも無いビサリの声に、ユイは弾かれたように後ろを振り向いた。シルヴァー有翼の成体と子どもも、ゆっくりとした動作でユイと同じ方向を向く。子ども達を連れたビサリのヘーゼルの瞳は穏やかに、氷がシュナミ溶けていくように揺れている。ユイはその瞳が伝えようとしている事をうまく捉えきれずに、金色の整った眉を少し歪めた。ビサリはゆっくりとした歩調でユイへと歩み寄ってきた。ヘーゼルの瞳は少しずつ揺れが収まって、やがては動きを止めて、平たい鏡のようになってしまった。それでもなお、強い意志が宿り続ける瞳は一直線に、【玉龍神】の血を引く蒼い瞳を射る。

「……シルヴァー有翼も無翼の龍達も、皆帰っていきよる……【玉龍サマ】の御怒りはお鎮みになられた。もうお帰り」

ビサリの穏やかな声に、シルヴァー有翼の成体は低く唸ると、先程吹き飛ば

したばかりのリーダー格の男にちらりと視線を飛ばした。刃毀れで表面がぼろぼろになった両刃の剣は遠く彼方まで弾き飛ばされて、男はすっぴりのびていた。後頭部を強く打ったのか流血しているが、死んでいる訳でもない。

(巫女サマの前で……殺生はしたくなかったです……)

シルヴァー
有翼の成体は、ユイの頭の中に「声」を響かせると、ユイの顔を真っ直ぐ見据えた。赤銅色の瞳に、風が巻き起こったかのような揺らめきが映る。

(【玉龍サマ】の御怒りがこれだけで済んで良かった……感謝しています、巫女サマ)

「まだ……あなたの言っている事はよく分からないけれど……」

ユイは、最後まで言えなかった言葉を浮かび上がらせた蒼い瞳で、射られた矢が残した真っ直ぐな軌跡のように、赤銅色の瞳を捉えた。くれないいろつむじかぜ
紅色の旋風が巻き起こるその瞳の奥には、確かな「意思」があった。おそらくは、自分だけが「彼女」の瞳に垣間見る“それ”を、ユイは自分の奥底にしっかりと刻みつける。

何千年も前の昔から描かれ、様々な形となって身体に組み込まれていく、様々な形で世界に足跡を残してゆく、自らの身体にも心にも絡みついた【血の螺旋】の一部である「彼女」を。「彼女」の意思を。

「彼女」が最後に残した羽ばたきの音と、巻き起こる疾風はやてに舞う砂塵の一つ一つでさえも、ユイはしっかりと刻み込んだ。

きゅーい、と有翼シルヴァーの子どもが悲しそうに鳴いた。

「ついておいで、ユイ」

木漏れ日が落ちる、森の中。

無翼シィアスの龍達が残っていた【神の御怒り】の痕跡が、辺り一面に散らばった中で、ビサリはいつものように大木に凭れかかって、杖の先で地面を掻いていた。ユイは行儀よく正座したまま、膝に手を置いて、蒼い瞳でビサリを見据えている。そんなユイの肩では、当たり前だという風な顔をして、瑠璃色の瞳をぐりぐりと動かして、頭をきよるきよると動かしている有翼シルヴィーの子どもがいた。頭を動かす度に、ちゃりちゃり、と首に巻かれた細い鎖が繊細な音を立てる。

「すっかり懐かれたようだね……それも、お前が【巫女】である証さ」

ビサリは穏やかな微笑みを絶やさずに、杖の先で地面に不規則的に線を描き続ける。ユイは真顔のまま、ビサリをじっと見つめ続けた。有翼シルヴィーの子どもはきゅーう、と鳴くと、ピンク色の舌で、ペろりと自分の口の端を舐め上げる。

やがてビサリは杖を動かす手を止めると、顔を上げた。

「さあ……順番に話していこうか」

ビサリは何かを決心したように、杖の先で地面をこつこつ、と叩いた。ユイは瑠璃色の瞳を細めて、気持ち良さそうに頬ずりしてくる有翼シルヴィーの子どもの小さな翼を撫でた。その瞳に迷いは無く、ただ、奥へ奥へと突き抜けていく真っ直ぐな軌跡が見えるだけであった。表情の浮かばないその顔は、木漏れ日に照らされて神聖エリザナという、見えない権威を放ち続けている。

「まず……お前は、私の思っていた通りに【玉龍の巫女】だった」

ビサリの、色の濃い瞳孔はぐるぐると回っている。まるで、孤独に回り、歯が無いばかりに他と交わる事の無い円い歯車のように。ビサリの意識に動かされているそれは、いつまでも永久的に回り続けていく。

「先程に、空から龍が降りてきていただろう？ ……あれが【玉龍サマ】さ。おそらくは、お前の強い意思に呼応して目をお覚ましになられたんだ」

「……【玉龍サマ】の御意思が私の意思に呼応したという事は、私が巫女である、れっきとした証拠という事ですか？」

表情を崩さないユイの顔を捉えて、ビサリは重々しく頷いた。へーゼルの瞳はゆっくりと細くなり、薄い唇に微かに意味深な笑みが浮かぶ。

「まあ、それもそうといえる。他にも証拠はあるさ。第一に……」

ビサリは目を開けて、杖を高々と掲げた。杖の先は枝が開けた場所を指し、そこからは、先程まで有翼シルウイーの龍達が飛び交っていた空が覗いている。

「さっきの碧風龍ウインリロッドと、言葉を交わしていただろう。頭コの中でな」

ユイはビサリの言葉に、あの赤銅色の瞳を持つ有翼シルウイーの龍 碧風龍ウインリロッドを思い出した。皿ほどもある、風紋のような模様が薄く浮かんだ鱗や、吹き荒ぶ疾風はやてを起こす、しなやかで強靱な美しい翼。

「この世界に存在する全ての龍族……お前は、その全てと、言葉を
使用せずに意思を疎通させる事ができる」

ビサリはゆつくりと杖を降ろすと、ヘーゼルの瞳をまた、ユイの
方へと向けた。瞳の中の円い歯車はまだ回り続け、止まる事のない
その動きは渦を巻くようだった。

「巫女は全ての龍族に尊ばれる存在。故に……」

ユイはゆつくりと肩越しに振り返った。きゅいい、ときよとんし
たような顔で鳴く有翼の子どもが、首に巻かれた鎖をちやりりと鳴
らして、ユイの蒼い瞳を覗き込む。ビサリは杖をまた持ち上げて、
その瑠璃色の無垢な瞳を指す。

「その龍の子どもにも懐かれているんだ」

きゅーいきゅいい、と地面の先に丸く削られた杖の先を警戒する
ように、有翼の子どもは高く鳴いた。ビサリはゆつくりと杖の先を
降ろすと、きゅいーっ！ きゅーいきゅいきゅい、と鳴き続ける有
翼の子どもを見据えた。

「ビサリサマ。さっきの龍が碧風龍なら……この子は一体？」

ユイは、高い威嚇の声を発し続ける有翼の子どもを膝の上に乗せ
ながら、ビサリに問いかけた。ビサリの老齢を思わせる眉がひよい
と持ち上がる。

「さあ……氷凜龍でもないし、灰暁龍の突然変異という訳でもない。
……もしかすれば」

ビサリは古い、自分が今まで培ってきた知識の本の、黄ばんだ薄いページをゆつくりと捲るように瞳を閉じた。そしてまた、ヘーゼルの瞳はゆつくりと開くと、ユイの蒼い瞳を捉える。瞳の中で回る円い歯車は、永遠に他と噛み合う事のない自らを嘲笑うかのように、ただ自虐的な音を立てて回り続けている。

「古代の幻種かもしれぬな」

冗談めかしたビサリの言葉に、ユイはあからさまに顔をしかめた。
有翼^{シルヴァー}の子どももきゅーうう、と鳴いて、怪訝そうに瑠璃色の瞳を細める。

「まあ……それは冗談として」

ビサリは穏やかにそう呟くと、杖の先で地面を叩いた。その音は、先程までの穏やかさとはかけ離れた、強く、少しの緩みも無く張られた蜘蛛の糸を震わせるような、衝撃的な音を響かせた。ユイは素早く姿勢を正すと、背筋をきっちり伸ばした。有翼^{シルヴァー}の子どもは、ごそごそとユイのジャケットの裾に頭を突っ込み、するすると中に入って行った。

「さあ……ここからが本題だ」

低く、緊迫に満ちた、いっ……もの声。

それは、ひどくよそよそしい響きとして、ユイの鼓膜に響いた。

「北から東北東が氷猫国、東から南東が水虎国、南南東から南南西が鳳凰国、南西から西南西が雷狐国、西から北北西が風狼国」

乾いた地面に、不規則的な線によって描かれた六大聖獣国の地図を、一つ一つ明確に叩き続けながら、ビサリは厳しく凜然とした声ではっきりと言葉を放つ。その声には、いつもの穏やかさは掻き消えて、ただ、冷徹とした使命感が宿っているだけだった。ユイはその声に耳を傾けながら、両手を地面についてビサリのすぐ向かい側で、浅い線で地面に描かれた地図を覗き込んだ。肩から滑り落ちた日輪の光を宿した絹糸の房のような髪が木漏れ日に当たって光つても、その蒼い瞳はまっすぐ射抜くように地図を睨み続けている。

ビサリは杖の先だけを見つめて、鋭い光が走るヘーゼルの瞳を動かしている。

「どの国にも一人ずつ、必ず【玉龍士】はいる。だが、この頃では内乱や革命が次々と起こっているんだ。混沌の齎もたらす災いのせいさ。せつせと汗水垂らして、主君に仕えていた百姓達の気がおかしくなつて主君の首を飛ばしたり、土地や富を争って国内だけで争いが起こってる。だから、この頃では難民や流民が他の国々へ流れ出している。【玉龍士】もそれに、混じっている可能性も無いとは言えないんだ。もしかすれば、一つの国に一人以上の【玉龍士】がいるかもしれないという事だ」

ビサリは間髪いれずに、杖の先を素早く地図の上で踊らせながら口早に説明した。ユイは額に落ちてくる前髪を気にもせず、ただ、じつと地図と地図の上で踊る杖の先を見つめている。

「【巫女】の使命は、自らの身体に眠る【核】の覚醒をもって、【玉龍神】を六大聖獣国に召喚する事。だが、召喚においても【核】の覚醒においても、【玉龍士】の助けがなければ執り行う事はできない。本来【巫女】と【玉龍士】は、永きに渡る時空ときが紡いできた絆に加え、何かが手繰り寄せた運命テイジビリアの絆でも、強く結ばれているんだ」

ビサリはそこまで言うと、すつと洗練させた滑らかな動きで、顔を上げた。ヘーゼルの瞳に精悍な眼光が光って、孤独に回る歯車は、それでも律儀に回転を続けている。ユイも前髪を揺らして顔を上げた。美しく整った小さな顔に踊る蒼い瞳は、静謐な泉のように澄んで、どこまでも落ちてゆく深海のような、深い覚悟に満ち溢れている。

「いろいろな事が、すぐに起きすぎてしまったようだ」

水たまりに落ちた、一つの滴のように。

ビサリの言葉は、ただ静かに、木の葉がお互いに擦れ合い、さわさわと音を立てる森の中に吸い込まれていった。

風がユイの金色の髪を戦そよがせて、さらさらと靡く。その毛先には、黒く変色した血が、迫り来る【混沌】のように付着していた。

「……もう遠くはない。【混沌】は、世界を蝕んでいくだろう」

据えた声は予言者の言葉のような、真摯な響きに満ちている。

「そのために……お前は生まれてきたんだ。志を同じくする聖獣の士と共に、【玉龍サマ】をこの世界に、この国に御導じゆんきしなければならぬ」

ビサリの瞳に、また、あの穏やかな光が灯った。

「【混沌】は待つてはくれない。北西へと向かうんだ。風は、戦い

の象徴。何物をも斬り裂く無敵の刃……その能力を持つ、【風狼の士】を探すのだ」

きゅーう、と有翼シルヴェーの子どもが一声鳴いて、ユイのジャケットの襟からぴよこんと顔を覗かせた。

風だけが、音を立てていた。

夜明け。

空へ昇っていこうとする太陽の鋭い光が、明け方の空を覆う雲に遮られて、朱色のぼんやりとした光となって、空を仄明ほのあかるく照らし出している。早起きの鳥達が高く、小さく鳴き始め、ユイは空を見上げた。淡い朱色に染まった明け方の空に、あの碧風龍ウィンドロッドの瞳を思い出した。

混沌を待ち受ける、どこまでも果てしなく澄んだ、紅色の疾風が巻き起こる力強い瞳を。

「……準備できたかい？」

ユイが振り向いた方向には、ピサリが杖をついて立っていた。

か細い身体を杖に預けたその姿は、今更ながらに、とても彼女の存在が年を経たものとして再認識させてくれる。それでも、朝の空を焼く太陽を背負うようにして立つ、その姿は神聖エリザナと呼ばれるべきものに近かった。

金色の髪を黒い紐で一本に束ね、剣を帯刀したユイの姿を眺めて、ピサリは嘆称するように深い溜め息をついた。金色の髪は果てしな

く微妙な橙色に染められ、蒼い瞳は、透き通った水面が魚の尾びれに蹴られたかのように、優雅に揺れている。けれども、その瞳には一つの迷いも無く、そこに存在するのは大いなる意志と、彼方まで広がる世界を前にした不安に彩られていた。

「はい」

「その子も連れていくのかい？」

ビサリは、ユイの華奢な肩で瑠璃色の瞳をくりくりと動かしている、有翼の子どもに目を向けた。首に巻かれた白銀色の細い鎖に通った、雪の結晶を象った水晶の飾りが、首を動かす度に揺れる。

ユイは肩越しに有翼の子どもを振り返ると、にっこり笑った。

「ええ、私から離れてくれないから……名前も決めました」

「何という名前に？」

「……ラティア」

ユイは照れくさそうに言うと、ビサリはヘーゼルの瞳で柔らかかな視線を有翼の子ども　ラティアに注いだ。ラティアはきゅりりい、と甘えた声で鳴きながら、ユイの頬に気持ち良さそうに目を細めて頬ずりしている。

「純白……その子にぴったりだ」

ビサリも満足そうに頷いた。ユイは良かった、と小さく呟くと、焦げ茶色のブーツを履いた足をゆっくりと前に進めた。ビサリは少しだけ顔を上げて、眩しそうにユイの顔を見上げる。幼い頃から見えてきたその顔は、今や、世界を背負おうとしているのだ。

ビサリはそっと、ユイの掌を手を取った。その掌を覆う、薄い黒の手袋を外すと、ビサリは老いた掌でユイの掌を撫でた。

「お前は……【玉龍の巫女】であると同時に」

ピサリは慈しむように、ユイの掌を優しく握った。

「ただの、一人の娘でもあるんだ」

乾き、皺が寄り、しみが浮かんだ掌。

ユイはその掌の温もりに、あの、碧風龍フインリロッドとの会話を思い出した。

あの時、強く感じた気持ち。

ありありと思い出したのだ。

「何でも一人で背負い込むものじゃあないんだ。いざという時には

【玉龍士】や龍族を頼りなさい。何たってお前は……」

ピサリは顔を上げた。ヘーゼルの瞳には、限りなく広がるたおやかな草原のような、無限の慈愛に満ちていた。

「ただの娘なのだから」

ユイは、ゆっくりと屈むとピサリの老いた身体を抱きしめた。いつも、傍にいてくれた、大切な人を。

世界を救う理由、そのものの人を。

ただ、ただ、強く抱きしめた。

「行こっか、ラティア」

ユイは、黒く薄い生地の手袋を嵌めた手をしっかりと握りしめて、後ろを振り返らずに、朝焼けの空が覆い被さるようにして広がっている景色を眺めた。遙か彼方までひろがる森をつくる木々の葉は、艶やかに一枚一枚が光り始めていく。

一陣の風が吹いて、ユイの顔を撫でる。前髪が微かに揺れても、ユイの瞳は揺れなかった。ただ、前だけを見つめるその瞳は、目に見える事の無い真摯で直線的な軌跡を解き放っている。

その風に、碧風龍ウインリロッドのしなやかな翼が起こす風を重ね合わせながら、ユイは左腕をゆっくりと肩に水平に上げた。ラティアがきゅーいっ！と高く鳴いて、華奢な、自らの名前のように純白の翼を広げて羽ばたいた。しばらく宙を舞った、その小さな身体はユイの腕の程に止まる。

「“みんな”が待ってる！」

ラティアがきゅいっ！と同意するように短く鳴くと、ユイは歩き出した。

朝焼けの空を、一匹の碧風龍ウインリロッドが飛んでいた。

第三伝 大いなる意志の齒車（後書き）

やっとファンタジー路線に入っていけるかな？ という所です（笑）
ここまで読んで下さった方、ありがとうございます。

第四伝 立ち向かう者

「うわぁ……」

昼下がりに。

村を出てから三日。玉龍国の中心部より東に外れた村から、真っ直ぐ北西を目指してラティアと一緒に歩いてきたユイは、背の低い芝生に覆われた小高い丘の上に立って、なだらかな斜面の下に広がる、賑やかな都を見下ろしていた。真っ直ぐ、南から北へと伸びる通りの中でも、幅三十メートル程の、赤茶色や栗色、黄土色の煉瓦を敷き詰められた大通りが、都の中心を活気づかせている。

大通りの両側では、様々な店が扉を開いて、客を呼び寄せている。おそらくは貴族でも乗っているのだろう、豪華な馬車じゆうしゃが行き交い、こぎれいな身なりの子ども達がその合間を縫うようにはしゃぎ回っている。

玉龍国でも首都、「神央」シエーベルと並ぶ程の活気と規模を誇る「絢華」チエルシアの都を見下ろして、ユイは蒼い瞳を丸くした。

「……すっごい」

ユイがぼつりと呟くと、ラティアもきゅー……と感嘆したように高く鳴く。遥か下方の賑やかさに、田舎育ちのユイはいまいちピンと来ないで、立ち止まったままだった。心地よいそよ風が吹いて、ユイのスレンダーな身体のシルエットを切り抜くように通り過ぎていく。その風に背中を押されるような気がして、ユイはゆっくりと歩を進め始めた。

「……はい、じゃあね、その階段を上った所の一番奥。その部屋を使ってちょうだい」

一番東寄りの通りの宿屋で、とりあえずは二日分の宿泊費を支払って部屋を取ると、ユイはよく磨きこまれた、アヌーテルの木の節くれだった枝で造られた手すりをしっかりと握って、部屋へと向かった。一階では、丸いテーブルを囲み、昼間から大きな青銅のコップで葡萄酒を飲みながら話をしている男達や、商売屋の女達が幼い子どもを連れて食事をしている。

ユイは一階を見下ろせる、狭い板張りの廊下に足音を響かせながら、一番奥の部屋の扉を開けると、中に入ってしっかりと鍵をかけた。粗末で、けれど暖かみのある椅子が一脚と丸い天板のテーブル。分厚い、角閃龍の刺繍が入ったカーテンのついたベッドには、洗いたてのように真っ白な木綿のシートとふかふかの毛布が敷いてある。

ユイは出窓に近寄って、伏せられた青銅の小さなコップに銀色の水差しから水を注ぐと、少し口に含んだ。ラティアがきゅいっ、と鳴くと、ぴよんと出窓に飛び乗って水をせがんだ。ユイが、ラティアの開いた口に水差しから水を注ぐと、ラティアはゆっくりと瞬きしてごくごくくと、うまそうに水を飲む。

「さて……どうしようか、これから？」

ユイは水差しを置くと、ラティアを抱えて荷物の中から地図を引っ張り出し、テーブルの上に広げた。出発の際、ビサリから書いてもらった地図は、細部まで事細かに記され、ユイは指で風狼国から現在地の距離をなぞった。

「三日で絢華チエルシアに着いたなら……、風狼国に到着するまでは結構かかるなあ……」

ユイは溜め息をつくくと、椅子に座ってテーブルに頬杖をつき、風狼国の国境線をなぞった。【玉籠土】は何処にいるとも分らない。ユイは地図を畳むと、椅子から立ち上がり、ブーツの先で床を蹴った。ラティアがきゅーい、と気遣うように鳴く。

「ん、大丈夫だよラティア。とりあえず買い物に行こ」

大通り。

ユイは元気に走り回る子ども達にぶつかりそうになりながら、人々が行き交う中を、その流れに吞まれそうになりながらも歩き続けていた。すれ違う人々がユイの姿を見ると、みな一様に振り返る。

最近では希少価値が高く、遊郭ではそこらの男には手が出せない程の高値がつく色髪色瞳シヤナシオンの少女は、ここ絢華チエルシアでも珍しいのだろう。

ユイは人々の視線を感じながら、肩から下げた鞆の中で外の景色に目を光らせるラティアに気を使いながら、足早に目についた老舗らしい構えの、食料品店に入った。

「……いらっしやい」

店番をしているらしき茶髪の少年が、驚いたように目を丸くして少女の来客を見つめた。彼も、大通りを行き交う人々のように色髪シヤナシオン色瞳を見るのは初めてらしい。太い梁が何本も通った広い店内には、たくさんの女性やユイと同じ年頃程度の子どもで溢れ返っていた。麻紐を三つ編みにした丈夫な、八十センチ程の紐で豚肉や天兔フューロップの肉が梁から吊るされている。

干し肉の他にも、様々な形や色をした野菜や、小麦粉に調味料、子ども達が群がっている棚には菓子類も並んでいるようだ。ユイは、ラティアが肉を見つけて鳴き出さないように、なるべく肉が

上にぶら下がっていない通路を選びながら、必要なものを書いてきた紙をジャケットのポケットから引つ張り出した。

菓子類の棚で騒いでいた子ども達も、ユイに気づいて目を丸くする。

「あの一……」

ユイは、一通り全部の棚を見終わると、硬くて黒いシェベリオーズの木で造られたカウンターの向こう側の、店番の少年に話しかけた。少年はどきまぎして、座っていた丸椅子から立ち上がると、丸椅子が音を立てて倒れた。奥の方で他の子ども達が笑っている。

「リフレインド石英鹿の干し肉ってある？ どこにあるか分からないんだけど……」

ラティアは、豚肉も鶏肉も食べなかった。試しに蛙肉もやってみたが、一番嫌いだっただのか翼で弾き飛ばしたのだった。蛙肉はユイ自身も嫌いだっただが。

少年は、それを聞いてはたばたと足音を立てて、後ろの扉を開けて転びそうになりながら中に入って行った。が、途端に耳を劈くような音が聞こえて、ユイは肩をすくめた。ラティアもきゅ……と小さく、鞆の中で鳴く。

しばらくして少年は、打ったのか側頭部を押さえて、羊皮紙の包み紙に包まれた物を持ってきた。少年はユイにそれを渡すと、視線をあちこちに飛ばしてぼそりと呟いた。

「……三百リズットだよ」

「ありがとう」

ユイはにっこり笑うと、リフレインド石英鹿の干し肉を受け取って、財布から

銀色に光る百リズット硬貨を三枚出した。それを少年の手に渡そうとして、ユイは、はたと思い当って少年に顔を寄せた。店を見回すと、ユイは小声で少年に話しかける。

「……風狼国で、最近目立った内戦や革命が起こったりしてない？」
「風狼国？」

少年は、ユイの蒼い瞳にみとれたまま呟いた。店の奥の子ども達が顔を寄せ合って、ひそひそと会話をしている。ユイはちらりと怪訝そうな視線をそっちに向けると、また少年の方を向いた。

「風狼国……風狼国……」
「内戦とか革命って言っても、難民や流民が出てるもの限定でって事」

「……よく分からない。そういう事は、その人達に聞けば？」
少年の指さす方向には、調味料や小麦粉の並べられた棚の前で、先程からいつまでも話をしている四人の女性がいた。ユイは金色に光る綺麗な眉を思い切りしかめた。

「何で、あんなおばさん達の長々しい話に付き合わなきゃならないの？」

「い、いや……付き合えとはいってないよ。ただ……」
「あなた、こういうおばさんの集まる店で働いてる割には全然分かってないのね？ 話しかけたらそれで即刻、長々しいお話の仲間にされちゃっわ」

「ちょ、ちょっと……！ 聞こえちゃうだろ！ 大事なお客様なのに……！」

少年は焦ったように女性達の方に目をやった。先程まで話をして

いた女性達は、黒や茶色の目でじつと二人を睨んでいる。ユイはむつとした目で彼女達を睨み返すと、石英鹿リブラインドの干し肉を抱えたまま、さっさと出口の方へ向かっていった。少年は慌てて、名前も知らない色髪色瞳シマナツオンの少女を呼び止める。

「ねえ！ 君、名前は！？」

「さあ」

ユイは肩越しに振り返ると、皮肉っぽく言って店を後にした。

「ねえ、知ってるラティア？ この世界におばさん程しつこいものってないのよ？」

ユイはうんざりしたようにベッドに座って、向かいの空いたベッドに座っているラティアに向かって話しかけていた。ラティアは長い間、ユイが大通りで用事を済ませるまで鞆の中だったので、不機嫌そうにきゅーいきゅーと鳴いた。大通りでの人の動きに惑わされずに進むコツを得たユイは、鞆の中のラティアにこれ以上負担をかけないように急いではいたのだが、他の店で買い物をする時に決まって、「おばさん」に邪魔されてしまったのだった。

「田舎のほうはまだマシよ！ おばさんっていう生き物は、田舎の方が口うるさいだけで済むんだから！ こっちのおばさんっていう生き物は、すつこくしたたかで利己的よね！」

ユイがかりかりしたようにそう言うと、ラティアもきゅーっ！と同意するかのように鳴いた。その時に、ユイは、はたと気づいた。

巫女は、全ての龍族と、言葉を使用せずに意思を疎通させる事ができる。そう、ピサリは言った。だが、ラティアとは違う。ラティアは直接的に、ユイの鼓膜に音を響かせるのだ。しかも言葉ではない、龍族特有のものなのである。う鳴き声で。

その事に思い当ると、ユイはがっくりとうなだれて、膝を抱えた。そんなユイの隣にラティアが瑠璃色の瞳をくりり、と回して、ぱたぱたと純白の小さな翼をはためかせて着地する。

「……今さら自信喪失したって何にもならないのに……」

ユイは膝の頭に顔を埋めたまま、小さく呟いた。ラティアが、ユイに寄り添ってきゅい……と慰めるように鳴く。

「風狼国についたって……何にも得られなかった」

ユイが落胆したように呟いた瞬間。

外で、大きな音が響いた。

ユイは素早く反応して顔を上げると、傍らに置いた剣を掴んでベツドから飛び降りた。ラティアもユイの肩に素早く飛び乗る。大きな足音を硬い床に響かせて、ユイの黒い手袋を嵌めた手で、鍵のかかったままの扉をいとも簡単に開け放った。

「玉龍の巫女はどこだ!？」

床に薙ぎ倒された机や椅子。砕けた青銅レイゼンのコップ。隅では、カウ
ンターにいたおばさんと、客の数名が震えて固まっている

その中央で、背の高い、がっしりとした体つきの男が、巨大な槌ハリマ
を背負って貪欲な笑みを浮かべていた。

「……ねえラティア。知ってる？ 私、感情の起伏ってやつが結構
激しいんだよ」

滑らかな音を立てて、鞘から刀身が引き抜かれた。綺麗に手入れ
された、鋭く光る銀色の刃。

「それと、気持ちの切り替えに、失くした自信を取り戻す速さも」

ユイはゆっくりと、顔の前に剣を構えた。蒼い瞳は、強い「自信」
が漲みなぎっている。

「負けず嫌いなところもね!」

第五伝 太陽の陰の密告

「負けず嫌いなところもね！」

ユイはそう叫ぶと、華麗な身のこなしでアヌーテルの木の手すりをひらりと飛び越えた。そのまま、一階へ見事に着地すると、膝のばねを利用して、槌を背負った男に突進した。瞬時に、きらりとユイの剣の刀身が光る。

男はそれに反応すると、背負った槌の無骨な柄を握って、重厚な鋼鉄でユイの剣を防いだ。金属がぶつかり合う音が響き渡って、隅で固まっていた人々が、ひっと息を呑む。

「なかなかのスピードだぜ……！ お前が巫女だな！？」

男はそのまま、槌をユイの方に勢い良く押し出した。ユイは自分の方に、恐ろしい力で迫ってくる槌を剣で受け止め続けながら、その反動を利用して後ろへ飛び退った。硬い板張りの床にブーツの底が擦れて、乾いた音を立てる。ユイがぐっと強く剣の柄を握ると、ユイの方へと走って向かってきた男は槌を振りかざして、重厚な鋼鉄を、頭に振り落とそうとする。

「これでどうだ！」

男は、自信に満ち溢れた褐色の瞳を輝かせた。が、ユイは咄嗟に右足を振り上げて、鋼鉄の重い一撃を防いだ。男は愕然として、柄を握る手に力を込めたが、ユイは歯を食い縛ってその力に抵抗する。

「ぶざけんじゃ……」

ユイは食い縛った歯の奥から声を絞り出すと、瞬間、右足に渾身の力を込めて槌ハリマごと男を蹴り飛ばした。

「ないっ！」

短いユイの声と共に、蹴り飛ばされた男は漆喰の壁に直撃し、それだけでは収まらず、厚いその壁を突き抜けたのだ。壁が砕ける、鈍い音がして男が通りに吹っ飛ぶと、ユイは粉々になった、青銅レイゼンのコップの破片や、折られた椅子の脚が散らばった硬い床を駆け抜け、男が突き抜けていった穴を通り抜けると、鋭く光る刀身を下に掲げて男に飛びかかった。

剣先が男の喉に突き刺さる直前、男は俊敏な動きで身をかわし、間一髪ので、名も知らぬ色髪色瞳シヤナンオンの少女 【玉龍の巫女】に喉を斬り裂かれずに済んだ。

「クク……【玉龍士】のいない巫女さんにしては、中々じゃなーか」

男は素早く体制を立て直すと、槌ハリマを肩に担いでにやりと笑った。ユイは、赤茶色の煉瓦に突き立った剣をいとも簡単に引き抜くと、蒼い瞳できつと男を睨む。ラティアもきゅいっ！ と鳴いて、威嚇するように翼を大きく広げる。

「……何であんた、私がそうだって知ってるの」
「大通りの店で、店番してるガキに聞いたんだよ。色髪色瞳シヤナンオンの玉龍族の純血がさつき来店したってな。このご時世だ、出てきたっておかしくないだろ？」

ユイは、店番をしていた茶髪の少年の顔を思い出して、ぎりりと歯軋りした。迂闊に人に物事を聞くんじゃないなかつた、と、ぐつと拳を固めると、ラティアがふーっ！ と瑠璃色の瞳で、男を睨む。

「どつちにしろ、いい奴でもなさそうね……」
「そういうこつた!」

そう叫ぶなり男は、肩に担いだ槌ハリマの柄を握って、ユイの方向に向かつて凄まじい強さで投げつけてきた。それは空気の流れを歪ませながら、ユイの頭上を通り過ぎ、回転を続けながら内側にカーブを描いて、ユイの背骨を砕こうと迫ってくる。

が、背骨に鋼鉄アイルの鈍重な一撃を食らいそうになりながらも、ユイは咄嗟に身を屈めた。頭上すれすれを、鋼鉄アイルが生み出した変形的な風の流れが通り過ぎる。

「くそっ!」

男は悪態をつくくと、自分の方へと向かってきた槌ハリマの柄を受け止めた。それと同時に、姿勢を低く保ってこちらに疾駆してくるユイが目に入り、攻撃を感知する直前に剣先が胸を一文字に斬り裂いた。鮮血が弧を描くようにして飛び散り、ユイの頬に、ラティアの翼に付着する。

胸を走った鋭い痛みにも男は呻くと、必死に足を振り上げてユイの胸を蹴った。ユイの小さな身体が、上半身から煉瓦の敷き詰められた通りの地面に落ちていく。

「ナメんなっ!!」

そう叫ぶやいなや、ユイは後方転回の要領で煉瓦に手をつき、厚いブーツの底で男の顎を思い切り蹴飛ばした。がちつ、と歯がぶつかり合う音がしなかったのは、多分、舌を挟んだのだろう。だとしたら、相当痛いはずだ。もしくは死んでしまったのかもしれない。ユイはゆっくり立ち上がると、剣先を男の方に向けて顔を覗き込ん

だ。口から血が垂れている。やはり舌を噛んだのだろう。

「……死んでないよね」

ここで人を殺したらえらい事になる。ユイは仕方なく男の手を取って、手首を覆う汚らしい布を指でつまんで剥ぎ取ると、脈を取った。弱々しいが、ちゃんと脈はある。ユイは安堵のため息をつくとき、先程自分が空けた穴から通りの様子を窺っている宿屋のおばさんに声をかけた。

おばさんの顔には、ありありと驚愕の二文字が浮かび上がっている。

「すみません……お医者さんか、インフルジャ 治癒魔法を使えるウイザリア 魔導師を呼んできてくれませんか？」

「四百リズットと三十ブロン」

「……あんだ、もうちょい愛想よくならないのかい」

「愛想がいい奴程、まけるって言われたら弱いからね」

茶髪の少年は、お客のおばさんからリズット銀貨とブロン銅貨を受け取ると、忠告を聞きもしないで、カウンターにつけられたフックにぶら下げられた袋に色ごとに硬貨を分けて入れた。おばさんは自分が買っていった物を買った物袋に入れると、ふん、と鼻を鳴らして少年を一瞥するとさっさと店を出ていった。

と、その時。戸口から、あの時の少女が走って入ってきた。おばさんにぶつかつたものの、謝りもせずにかウンターの方に直進してくる。さらさらの金髪に、宝石みたいな蒼い瞳。右の頬には、擦つたような赤黒い跡がついていて、華奢なその肩には真っ白な龍が乗

っていた。

「ちよつと！ さつき、いかにも人相の悪そうな奴に私がここに来た事、言つたでしょ！？」

「え……！？」

「え、じゃないっ！」

ユイは熱^いり立つて、抜刀するとその剣先を少年に向けた。血は拭き取られているものの、頬に血のような跡がついた、幼生とはいえ龍を肩に乗せている色髪^{シヤナシオン}色瞳の少女にこんな事をされては、怯えなわけにはいかない。少年は首を横に何回も降ると、髪と同じ色の瞳を何度^{しばた}も瞬いた。

「ち、違う！ 僕じゃないよ！」

「あんた以外に誰だつていうの！？」

「し、知らない！ それより剣を降ろしてよ！ 君、目立ちたがりな訳！？ こんな所で抜刀するなんて！」

少年の悲鳴のような声にユイは渋々剣を鞘に収めた。ラティアの威嚇の声に若干怯えながら、少年はユイの蒼い瞳を捉える。

「本当に僕じゃないんだ！」

「じゃあ誰だつていうの？ 私、いろんなお店回ったけど、店番が男の子だったのはあなたのお店だけだったわよ」

「だからって……」

力なく呟く少年を見て、ユイの心中は少しずつ変わり始めた。こんな少年が、あんな奴に情報を流したのか？ ひどいようだが、この少年に嘘を突き通す度胸は無いように思える。本当の事を突き通す度胸ならあるとは思つが。

「……じゃあ、一体誰？」

ユイは、美妙なカーブを描く眉を寄せた。ラティアがきゅう……と鳴いて、ユイの顔を瑠璃色の瞳で覗き込んだ。

第五伝 太陽の陰の密告（後書き）

だんだん路線がズレてきました；【玉龍士】は後からちょい出し
していく予定です。

第六伝 日輪と氷輪の狭間

「ねえ君……本当は何者なのさ？ 東の通りだけじゃない、この中央通りも君の噂で持ちきりなんだよ」

少年が困惑したような表情で言うと、ユイは腕を組んだまま、きつと目尻を吊り上げて蒼い瞳で少年を睨んだ。氷のように冷え切った目線に少年はひっ、と息を呑む。

「あなた、ホントに商売屋の息子な訳？ 普通、こういうところで昼間に働いてるなら、噂の内容一つや二つ、把握しとかないといけなものなんじゃないの？ 私は確かにここからずーっと東の、小さい田舎の村で生まれ育ったけど、こういう所で働いてる人は、そうあ…ら…な…き…や…い…け…な…い…っ…て…思…っ…て…た…け…ど…ね。あなたに会うまでは」

自分でも驚く位、よく舌が回った。ユイ自身そんなに饒舌なタイプではなかったが、今日は特に舌が回る。少年はユイとは対照的に、口をぱくぱくと動かしながらまぬけな顔で言葉を探していた。ラティアが瑠璃色の瞳を細めて、まるで蔑むかのように少年に冷ややかな視線を向けている。

ユイは話にならない、と少年に背を向けると、すたすたと戸口の方へと出ていった。少年は慌ててユイの方へ手を伸ばすが、勿論届かない。ラティアが白銀色の鎖が巻きついた細くて白い首をひよいっつと伸ばして、少年のひよろひよろとした小指をがぶりと噛んだ。

「あだっ！ ……ね、ねえ、君名前は！？」

「ユイ」

短く言い放つと、ユイは纏めて背中に垂らした金色の髪を揺らして後ろを振り向いた。視線は相変わらず冷たく、キネキアス角閃龍の角先のように鋭く尖っているかのようだった。

「姓は無いわ。あなた達のトコみたいにな、家柄に誇りを持つてる余裕なんてないもの」

「どう思う、ラティア？」

水筒の中の水で、混じりけの無い純白の翼に付着した血液を洗い流しながら、ユイは洗面器の中のラティアに問いかけた。きゅーうい！ とラティアは高々と鳴いて、円らな瑠璃色の瞳をぐりりと動かし、首を傾げた。ぱちぱちと瞬まばたきするラティアを見つめながら、ユイは溜め息をついて、薄い綿のタオルでラティアを抱き上げた。きゅるる、と可愛い声で鳴きながら、ラティアは水晶の飾りを揺らしながら首を思い切り伸ばして、ユイの頬をピンク色の舌でぺろりと舐めた。

少し湿ったような、温かい感触を感じてユイは安心した。気を失いそうになるくらいに。胸の奥に熱いものがこみ上げて、喉の奥まで突き上げてくる。

自分の無力さに悲しくなって、ユイはラティアを抱えたまま泣き出した。突発的に口が達者になる、ただの色髪色瞳シヤナシオンの少女。今の自分にぴったりと、自嘲的に思考を巡らせているユイの頬を伝う温かい涙を、ラティアは両頬とも律儀に舐め続けた。きゅーう、と氣遣うように鳴くラティアの、上下にゆっくりと動く純白の翼を撫でながらユイは嗚咽を漏らした。きゅーい、とユイの顔を覗き込んで鳴くラティアのくりり、と動く瑠璃色の瞳に自分の泣き顔が映る。

「……つく、めん……ごめんね……ラティア、ひつ、……くつ」

嗚咽が混じる声で、小さな自分の身体を抱きしめる主人にラティアはきゅーいきゅい、と応えるように鳴くと、すべすべとした左頬を伝った一滴の涙を舐め取って、塩っぽくなった口内でピンク色の滑らかな舌を一回転させると、水晶の飾りをちりり、と鳴らして主人の華奢で小さな肩に顎を乗せた。上下する主人の肩と一緒に、ごくゆつくりと純白の翼をはためかせるラティアは、穏やかな光を湛えた瑠璃色の瞳を細めてもう一声鳴いた。

「……うえ……ひつく……うう……」

涙を流し続けるユイの肩に顎を乗せたまま、ラティアは慰めるように翼を振った。

(泣かないでいいのネ……)

不意に頭の中に声が響いて、ユイは息を止めた。ゆつくり、本当にごくゆつくりと上下に動く、他と交わる事の無い純白の翼が蒼い瞳に映り込む。その翼の付け根をそつと撫でると、あの時の碧風龍ワインリロッドと同じように低く唸って、ぱたぱたと、艶めく蒼みを帯びた毛が先端に生えた尻尾を動かす。

(大丈夫なのネ……ユイの事、大好きなのヨ……だから泣いちゃイヤなのネ)

拙く、それでいて、とても愛しい声。幼い少女のような、少し生意気な印象を受ける、フューロップ天兎の鳴き声のように透き通ったその響き。穏やかなその響きは、ユイの心に柔らかに沁み込んで、止め処なく溢れ出る涙をせき止めた。

自分が【巫女】である証。
それこそが、この幼き龍ラティアの信頼であり、愛なのだ。
ラティアはぺろり、とユイの左頬をもう一回舐めると、きゅいと高く鳴いた。

(ユイはちゃんと巫女なのネ。ラチ達の神サマの子どもなのヨ)

ラチ、と舌足らずなラティアの一人称にくすりと笑うと、ユイはジャケットの袖で長い睫まつげについた涙の滴を拭った。

「さつてと……」

大通り。

相変わらず人々が行き交う、賑やかな大通りをユイは、ラティアをジャケットの中に隠して、行き交う人々の視線を集めながら歩いていた。腰近くまで伸びた、淡い栗色がかった金色の髪を紐で高く結び上げて、手袋と同じ生地生地の布を頭に巻いて髪を隠したのはいいが、金色の髪は所々から零れ落ちて、隠しようの無い蒼穹の瞳は、嫌でも人目を集めてしまうのだった。

人々の視線からするりすると、逃れるようにスレンダーな身体を人通りの中に紛れ込ませながらすたすたと歩いていくユイ。先程までの、自信を失くした頼りない女の子の面影は消え失せ、つくりのいい色白な顔は高貴シャルラという威厳を漂わせていた。

「めげてる訳にもいかないし……ね、ラティア？」

(そうネ。ラチの思ってるユイ、そういう感じヨ)

「ぶっ……ラティア、案外生意気だね」

(ぷつ、て何ネ！ しつねーヨ、ラチはこれでも女性フイヨシなのネ！)

ちよつと高飛車で生意気な、高く澄んだラティアの声をユイは脳内ノウチに感じると、ふと足を止めた。……きゅい？ と抑えた小さな声でラティアが鳴く。

ユイが足を止めたのは、女性で溢れ返っている瀟灑せうせいな外見の仕立屋と、店先に新鮮な魚介類を並べた魚屋の建物の間、小さくて薄暗く、ごみが放置された汚い裏通りの前だった。薄暗くてよくは見えないが、何人かの人影が動いている。不穏な空気を感じて、ユイは眉をひそめた。いい奴等でないのは確かだ。

(ユイ。あいつ等に聞いてみるネ、あーゆー奴に限ってよくものを知ってるのヨ)

「……」

偉そうなラティアの指図に、ユイは綺麗なカーブを描く金色に光る眉をびくりと動かして、ジャケットの中のラティアに冷やかな視線を向けた。きゅいっ……とラティアの怯えるような声が出た。余程ユイの視線が怖かったのか、びくつ、とジャケットの中で身を竦すくませた振動が伝わってくる。

「ま……けど、やってみるのも悪くないかも」

(だからゆったネ！)

ラティアの声を頭の中に感じ、ユイは滑らかな音を立てて、鞘から刀身を少しづつ引き抜いた。焦げ茶色のブーツを履いた足をゆっくりと裏通りの方へと進ませた。

「くそっ……役立たずがつ！　しくじりやがつて……っ！」
「おまけに、東通りの宿屋のババアの呼んだ魔道士に、ウイザリア治療魔法で治してもらったそうだな？」
「ちっ……違う！　チャンスだ、もう一回……」

裏通りのごみの山に隠れて、ユイは蒼い瞳を興味深そうにぐりぐりと回しながら、三人の男達の会話に耳を澄ましていた。饅すえた匂いが鼻につき、ユイは綺麗な弧を描く眉をひそめた。きゅい……と、ユイの華奢な肩で、饅すえた匂いに瑠璃色の瞳を不機嫌そうに細めるラティアが、小さく鳴く。

「頼む……っ！　次は必ず……」
「ははっ、笑わせんじゃねーよ。しくじってきたの何回目だ？」

小刻みに震える、先程のハリマ槌の男の前には、十三、四歳前後の少年が立っていた。微妙な灰色がかった焦げ茶色の髪をしたその少年はこの状況でにこにこ笑っている。笑みそのものが顔面に、隙間無く張り付いているような少年の顔はいやに不気味で、ユイの額を冷や汗が伝った。少年の背後に立つ、右目に革の眼帯をした大男が、片方だけの血走った眼をぎよろつかせてハリマ槌の男を睨んでいる。

「お前に任せようとも思っただけ……この頃ムシャクシャするんだ。この一件で大爆発だよ、よしてくれない？」
「ひいっ！　やめてくれ……次は　」

ハリマ槌の男が言い終える前に、青白く眩まはゆい閃光が走って、首がごとりと落ちた。ユイは唾を飲み込んで、こみ上げる吐き気をこらえた。生臭い血の匂いが、ごみの饅すえた匂いと混じって、強烈な悪臭が裏通りを占拠した。ラティアが何度も目を瞬しばたたく。

少年は、相変わらず緩やかな弧を描く眉をびくりとも動かさない

で、纏マムトっていた外套の中から、杖を取り出した。ビサリの杖とは違
い、小枝ぐらいの太さで、長さは四十センチ程度。

(ユイ……あの小さい方の男、魔道士ネ！ 雷使ヨ！)

「雷使……雷属性!?」

ラティアの緊迫に満ちた声を頭の中に感じて、ユイは、剣の柄を
ぎゅっと強く握った。金色の前髪が汗で額に張り付き、心臓の鼓動
が跳ね上がる。ラティアがきゅう……と、心細そうに鳴く。

「あー……やっぱり呪詞を破棄はきすると、威力がた落ちだね」

言葉とは裏腹に、満足そうな少年の声。ユイは息を潜めて、胸の
中で大暴れする心臓を落ち着かせた。

「やれやれ……面倒な事になったね。これを処理しなきゃならな
い、それに」

転がった首をボールのように足で弄もてあそびながら、少年は薄気味悪い
笑みを顔に張り付けたまま、ゆっくりと右の方を向いた。

「いらぬいネズミまで入ってみたいだ」

危険を感じ取って、ユイがごみの山から離れたと同時に、鋭い閃
光が走ってそれを打ち砕いた。冷たくて硬い、埃っぽい地面にプ
ッの底が擦れるのを感じながら、ユイは瞬間的に抜刀した。ラティ
アが瑠璃色の瞳を細めて、低い唸り声を上げる。

「いらぬいエサまで詰め込もうとするからだよ、玉龍の巫女さん」

少年は大男を後ろに下がらせて、右手に握った杖を構えた。張り付いた笑みは絶やさず、その顔には残酷な感情が浮き彫りにされていた。

が、ユイはそんな事を気にも留めずに、ただ呆然と剣を構えたまま、蒼く透き通った瞳を見開いた。心臓の鼓動が、少しずつ収まっていく。

「あなた……」

口の中がからからに乾いた。舌が上手く回らない。

「……さっきの男の子」

少年はにこにここと笑って、杖で肩をとんとんと叩いた。その顔は、食料品店で店番をしていた少年そのものだった。

第六伝 日輪と氷輪の狭間（後書き）

第一伝の書きかえに苦労してます（笑）

第七伝 堅き盾の嘶き

「さっきの男の子？」

少年はにこにここと笑いながら、動揺を隠しきれないでいるユイの方に目を向けた。髪の色は違うが、目鼻立ち、身長、瞳の色、肌の色、着ている服は違えど、店番をしていたあの少年と何もかもが同じだった。

「何の事だい？」

心臓の鼓動がまた高鳴り始める。体温が急上昇して、身体中を熱い液体が駆け廻るような感覚に襲われて、ユイはまたこみ上げてきた吐き気をこらえた。ラティアが低く唸って、瑠璃色の瞳で、不気味な笑みを顔に張り付けたままの少年を睨みつけた。

少年はとんとん、と杖で肩を叩きながら、ゆっくりと肩越しに後ろの大男を振り返った。大男の太い毛が密集した、漆黒の眉がぴくりと動き、片方だけの褐色の左目がぎよろりと動いて少年の顔を捉える。

「お前がやってくれ。魔源マジソールを使い過ぎた」
「御意」

次の瞬間、とてつもない衝撃がユイの刀身に響いた。

「きゃあああ！」

「何だ！？ 何があつたんだ！？」
「オイ……あの女の子、さっきの色髪色瞳シヤナシオンじゃないか！？」

大通り。

大男の強烈な突きをユイは咄嗟に刀身で受け止めたが、勢いを殺す事が出来ずに裏通りから吹き飛ばされて、大通りへと飛ばされてしまったのだ。大通りを歩いてきた人々は驚いたが、いきなり裏通りから飛んできた色髪色瞳シヤナシオンの少女よりも、筋骨隆々の荒っぽい大男に度肝を抜かされ、一瞬の内に人垣は割れていった。

ユイはまだ痺れる両手首を振ると、右手で剣の柄を強く握り直した。大男は表情一つ変えずに、背負った剣を鞘から引き抜いた。厚く、銀色に鈍く光る、幅の広い刀身。よくなめされた革を幾重にも荒く巻きつけられた柄。重厚感たつぷりの断切剣ゼルジヒートだった。

一番小さい型でも、軽く十ベリ口は超える断切剣を片手で軽々と持ち上げる大男に、それでもユイは鋭い眼光を相手に向けた。虚シヤンテが映る事の無い、一本の、何よりも強い芯が通った、蒼穹の瞳。

「あんたバケモンね。あんな奴とつるんでるから、当たり前だけど」
「無駄口を」

ユイの声に大男はやはり表情を変えずに、振り上げた断切剣ゼルジヒートをユイの方へと振り下ろした。風の流れがぐにやりと変形して、凄まじい威力を伴った厚い刀身が、ユイの頭蓋骨を砕こうと迫ってくる。

「トロいんだよ、肉の塊がっ！」

そう叫ぶやいなや、ユイは断切剣ゼルジヒートの一撃を受ける直前に、剣を真っ直ぐ構えて、厚い胸板に深々と突き刺して腹を蹴り飛ばした。厚い胸板から引き抜いた刀身の先が赤黒く染まり、鮮血が傷口から吹き出す。大男は不意を突かれて、腰から、硬い煉瓦の敷き詰められ

た地面に蹴り落とされた。

「力比べなら負けないから！」

きつとしたユイの言葉に、二人を取り巻く人々の間でどよめきが起こった。猛り狂った紅鬪牛レウルスの如き、狂気さえ感じさせる鋭く蒼いユイの眼光に、大男はぎろりと、褐色の隻眼を動かした。

ゆっくりとした緩慢な動作で、大男は立ち上がった。硬い煉瓦に叩きつけられた腰に手を当てたまま、よくなめされた厚い革の首輪をした太い首を回す。断切剣セルジビートの鈍く光る、重厚感溢れる刀身がきらりと光った。

「オイオイ……バケモンじゃねーか、あの男……！」

「骨が砕けちまってもおかしくねーのに……」

「それより、あの娘この力さ！ あんだけデカイ図体を一蹴りで吹っ飛ばしやがった……」

ひそひそと囁き合いながら、睨み合う対照的な二人を取り巻く野次馬達。ユイは鼻を鳴らして、右手で強く握った剣を振るった。刀身が風を切り裂いて、唸るような音を上げる。

「……お前も化け物だな。怪力娘」

「その首、へ押し折くってやってもいいのよ？ それとも、全身の骨を粉碎くされたい？」

「楽しみだ」

低く抑揚の無い声で呟くと、大男はすつと、断切剣セルジビートの十ベリ口を超す重量を感じさせない動きで、厚い刀身を据わった隻眼の前に掲げた。

「あんまり派手にやらかさないでくれよ、シダ」

少年は薄い笑みを張り付けたまま腕を組んで、大男
傷だらけの鞘を背負った、巨大な後ろ姿を見つめた。

シダの、

第七伝 堅き盾の嘶き（後書き）

ベリロ＝キロです。更新が遅れてすみません；

第八伝 汚水に潜む涅

(ユイ……ここじゃ目立ちすぎるヨ。周りの人も危ないのネ)
「分かってる……けど」

ちらりと蒼い瞳をシダから周りに移しながら、ユイは剣を構えたまま舌打ちした。他の裏通りに逃げ込めば、相手より機敏さに秀でたユイの方が不利になる。わざわざ、自分を窮地に追い込む事はできない。それに、周りを囲った人垣が邪魔になって外には出られない。

シダとユイを囲む人垣は、ユイ達が抜け出た裏通りの所だけ開けてはいるものの、そこには魔道士ウイザリアである先程の少年がいる。有翼シルウィーの龍ではあるもののラティアは幼生。ユイを乗せて飛び立つ事はできない。

「……突破口がない」

「突破口だと？」

ユイの呟くような声に、シダは漆黒の濃い眉を片方だけ持ち上げた。腕の筋肉が、ぴくりと動く。

「突破口などはない。お前は……」

ぎょろりとした褐色の左目が、虚ろにユイを捉える。

「ここで死ぬんだ。俺達もそろそろ、ここを離れる。色髪色瞳シマナシオンだから結構な噂話にはなるだろうが……」

「あんたみたいな胡散臭い奴が、こんな大規模な都市のど真ん中で殺されれば、私が死んだ時より噂の寿命は長いとおもっけど？ 殺

したのが玉龍族の純血っていうとこまで広まれば、下手したら伝説ね」

そう言つてユイが不敵に口角を上げると、シダのこめかみに青筋が浮かんだ。腕の筋肉が一気に盛り上がる。風の流れが歪んだ。

その次の瞬間、強烈な力を加えられて歪んだ空気と共に、ユイの横っ面めがけて、目にもとまらぬ勢いで断切剣ゼルジビートの刀身が殴りかかってきた。蒼い瞳が、一瞬見開かれる。

賽は、ようやく投げられた。

「うぐっ！」

どよめいた人垣がさつと割れると、分厚い刀身で殴り飛ばされたユイの身体が横に宙を飛んで、硬い煉瓦の上に叩きつけられる。口の中に生ぬるい血の味が広がって、ユイが薄目を開けると、眼前には断切剣ゼルジビートを構えたシダが映る。

(ユイ！ 起きるネ！ 早く！！)

ラティアの声が脳内に響くと同時に、ユイは悲鳴を上げる身体を無理矢理動かした。分厚く、鈍く光る刀身が、敷き詰められた煉瓦を打ち砕く。猫のように煉瓦の上にスライディングすると、ユイはシダを睨みつけたまま、血の混じった唾を吐いた。

「大口を叩いてくれた割には、運も腕っ節も弱いな」

低い声で呟くシダは、太い眉を動かす事もなく、また断切剣ゼルジビートを軽々と持ち上げる。ユイは舌打ちして、姿勢を低く構えた。時期尚早

すぎるかもしれないが、賭けに出るのも悪くない。

「死んで、噂話の一つにもなれ」

何かが碎ける音と、人垣の波のような悲鳴が重なった。

ユイは激痛に気が遠くなった。

ブーツの踵が、凄まじい重力と共に落ちてきた刀身に断ち切られ、切り裂かれた身から血が噴き出してくる。股をくぐり抜ける時に、左足を少しだけ残してきてしまった。

それでも、賭けに勝ったユイは、勝ち取った僅かな勝機に望みを託して、腰を捻り握った剣をシダの背中に突き刺そうと。

した瞬間に、手が止まった。

先程、シダが打ち砕いた煉瓦の通り道。

打ち砕かれた煉瓦の下に、黒く染まった空洞が空いている。

シダが素早く振り向くと、ユイの小さな身体は、煉瓦の下に潜んでいた空洞に飛びこんでいた。

暗闇の中で、足が地についた。素早く手で当たってみると、埃っぽく、少しだけ湿っている。水の流れる音がして、滝が起こす水音が遠くから聞こえてくる。降り立った地下は、どうやら下水道のようだ。ひどい臭いが鼻について、ユイは顔をしかめて上を仰いだ。

先程、飛び降りた穴から光が注ぎ、人々のどよめきが微かに響く。
こんな小さい穴からは、シダは入ってこれないだろう。だが、煉瓦を打ち砕いて穴を広げる事はできる。

(ユイ……大丈夫ネ？　ここじゃ確かに人目はないけど、その分、色々と危険すぎるヨ)

「へーきへーき」

ユイはラティアの方を見ずに、立ち上がって痛む左足を引きずって、小走りに埃っぽい道を走った。その後、点々とつく血の痕に気づくと、ユイはブーツを脱ぎ、頭に巻いていた布で足をきつく縛った。そのまま立ち上がって小さい鼠と何回もすれ違いながら、角を曲がる度に、空気が淀んでいくのを肌で感じながら、ユイを息を切らして走り続けた。

ユイの足音にぴりぴりと神経を尖らせていたラティアが、翼をばたつかせた。瑠璃色の瞳に翳がよぎる。

(待つネ！)

「え？」

ラティアの鋭い声に、ユイは思わず足を止めた。足を止めた途端に、左足の痛みが心臓の動きに合わせて疼き始めた。思わず眉を寄せたユイの頭の中に、ラティアの声が木霊する。

(嫌な予感するのヨ……その角を曲がった先。ドロドロしたもの、ラチの方を見るネ)

「ドロドロしたもの……生きてるの？」

(分からないネ。壁を突き通して、こっちを見てる感じヨ)

怯えたような声に、ユイはジャケットの前を開けて、ラティアを

その中へと入れた。微かな震えが伝わってきて、ユイの額にも冷や汗が伝った。

(怖いネ……ユイ)

「……ごめんラティア……目えつぶってて」

ユイは、下水道に飛び降りた時に鞆に収めた剣を抜いて、ラティアをジャケットの上から左手で抱きしめたまま、右手でぎゅっと剣の柄を握った。痛む左足を動かして、角の方へと近づくと、空気はどンドン陰鬱いんうつになっていく。

大きく息を吸って、ユイは恐怖に高鳴る心臓を抑えたまま、右足を踏み出した。

第九伝 遺憾の冷笑

「……え」

曲がり角の奥。

どろりとした重く黒い影が、付き当たりに放られた“もの”を覆い隠していた。陰鬱とした、重い影が、その白く濁った色をした“もの”の境界線をぼんやりとさせている。細長い形状から丸い形状、緩やかに反り返っているものまで見受けられる。

「骨？」

剣の柄を握った右手から、ゆっくり力が抜けていく。柄を取り落とすと同時に、高い金属音が下水道中に、出口のない悲鳴が剣にそれを見出したかのように鳴り響いた。ユイのジャケットの襟から這い出てきたラティアの瑠璃色の大きな瞳が、きゅっと細くなって、純白の鱗に覆われた身体を身震いさせた。

(こいつが……ドロドロの正体ネ)

山と積まれた人骨の山。元は人体の基礎を築いていたものであった、不気味な白濁とした硬い物体は、何十本、何百本と積み重なって、その頂上を頭蓋骨が占領していた。眼球が動いていたのである。う、二つの虚ろな空洞の奥は黒く塗り潰され、恨みがましく、ユイ達の方を見つめているようだった。

立ち尽くしたユイの足元を掠めて走り抜けていった鼠が、人骨の山を乾いた音を立てて登っていくと、砕けた骨の欠片が落ちて、山の麓に広がっていた乾き切った赤黒い血の海に、白く虚ろなその存在を誇張させるかのように落ち着いた。

一体、何十人もの人々が亡くなったのであろうか。よく見てみると、まだ新しい血がこびりついている頭蓋骨がある。おそらくは、この山を形成している骨の殆どが、死者から直接的に肉を剥ぎ取ったのだろう。どの骨にも白濁とした骨本来の色の部分の他に、黒ずんだものがへばりついている。

「素敵だろっ？」

不意に声が響いて、ユイはさつと後ろを振り返った。

緩やかに仕立てられたチャコールブラウンの外套^{マント}。短い、焦げ茶色の髪。栗色の瞳。髪と同じ色の、綺麗な弧を描く細い眉。

薄い笑みの仮面を顔に張り付けたまま、少年はゆっくりと、ユイの方へと歩を進めてくる。下水道の異臭は気にもならないらしい。

「あなた……！」

視界に少年が映ると、ユイは反射的に取り落とした剣を瞬時に拾い上げた。ラティアが、急いでジャケットの中に潜り込む。少年はユイの行動を見て、ひょいと肩をすくめた。

「ひつどいなあ……そこまで怯えなくてもいいんじゃない？」

「……あんたの連れは、置いてきたわよ」

「連れ？ シダの事か。奴なら……」

にこにこ笑いながら、少年は外套^{マント}の襟についた紐を解いて、外套^{マント}を下水道の流れに投げ捨てた。異臭を放つ汚水に流されていく外套^{マント}に目もくれずに、少年は外套^{マント}の下に隠されていたものを、埃っぽい側道に放り投げた。

鈍い音を立てて、ごろりと、それは転がった。

「うえ」

ユイは、胸から突き上げてくる熱い液体を感じて、思わず口に左手を当てて嘔吐えずいた。喉まで押し上がった熱い液体が、喉をじりじりと焼く。思わず膝をついて、剣の柄に両手をかけて嘔吐えずきが終わるのを待つと、じわじわと後味の悪い疲労感が身体中に広がっていく。

食事をしていたら、間違いなく吐いていただろう。

側道に転がったのは、シダの首だった。

「僕がここに来るまでに偶然会ってね」

少年は、シダの縛もつれた髪を踏みつけた後、額に足をかけた。虚ろな瞳が、早くも濁り始めている。

「命乞いされるのは大っ嫌いなんだよ。こいつも晴れて、僕にまわりついてきたくずの仲間入りさ」

冷めた表情へと豹変した少年は、頭を側道の端に蹴り飛ばして、杖を構えた。

「完璧でありたいんだよ、僕は」

笑っていない冷徹な目が、ユイを捉える。

「完璧な僕が認めた奴等はみんな、くずだった」

薄く、残酷な笑みが顔中に広がっていく。

「僕が完璧ではない証拠を見てしまったやつは、たとえ巫女である
うが 皆殺しだよ」

杖から白い雷撃が迸ると同時に、ユイはちつと舌打ちして、剣を
握ったまま、その雷撃をかわした。

第九伝 遺憾の冷笑（後書き）

更新、大幅に遅れ；；すみませんでした。

第十伝 “求める” ものとは

頬を掠めた、白い雷撃から猫のように飛び退って、ユイは瞬時に抜刀しようと腰に手を伸ばした。薄い手袋の生地越しに、冷たい細い柄の感触が伝わるのを確認して、柄を握る。

（止すネ！ 感電するヨ！）

ラティアの鋭い声にユイはぐつと歯を食い縛り、素早く柄から手を離して、杖から迸り出た新たな雷撃から座り込んだままの体勢で足首に体重をかけ、生じた瞬発力により後方転回を行ってかわした。少年の顔には、今や微笑は掻き消えて、険しく歪んでいる。栗色の瞳には狂気が宿り、杖を握る手は関節が白んでいた。

向かいの側道に飛び移り、ユイが少年の方に向き直ると、彼女の蒼い瞳に幾本もの雷撃が飛び込んできた。

「痛っ！」

触手の如く伸びてきた、幾本もの雷撃から身をかわし切る事ができずに、その内の一本が腕に巻きついた。瞬時に服を焦がして、肌を焼かれる感覚が鮮明に伝わって、ユイは悲鳴を上げた。じりじりと焼けつく痛みに、咄嗟に腕を大きく振って、絡みついた雷撃を振り切った。

血が滲み始めた腕を強く握って、眼光も鋭く、ユイは少年を睨みつけた。ラティアが牙を剥き、小さな翼を限界まで伸ばす。

（^{ピシッフル}魔源は限りが無いワケじゃないネ！ とにかく逃げ続けるのヨ！）
「分かった！」

横から零れ落ちてくる薄暗い中でもその存在が浮き立つ金色の髪を、素早く黒い紐で束ねると、またも向かってきた無数の細い雷撃を俊敏にかわして、ユイは少年の方へと向かっていった。低い姿勢を保ったままユイが側道を走り抜けると、そのすぐ後ろを雷撃が次々と貫いて壁を黒く焦がしていく。

少しずつ焦燥の表情を見せ始めた少年は、自らが握る杖から迸る雷撃の威力が落ちてきたのに気づいて舌打ちした。早く仕留めなければこっちがやられてしまう。

「ほっ！」

小さく掛け声を上げて少年がいる側道にユイが飛び移った。金色の髪が尾を引くように暗闇に弧を描いて、ブーツを履いた足が綺麗に着地する。その次の瞬間には地面を蹴り飛ばし、真っ直ぐにこちらに向かってくる。華奢な肩に乗り前方を睨む、幼く白い龍の瞳が妖しげに鋭く輝いた。

「くそおっ！」

奥歯が軋む程にきつく歯を食い縛ると、前髪の下で狂った獣の如く爛々と光る目でユイを睨み、杖を握る手をぐっと伸ばした。瞬間、青白い雷光が風船のように大きく球状になって膨れ上がる。

「ラティアっ！」

弾け飛んだ光の弾から放たれた一条の太い雷撃がユイの顔を捉え損ねたものの、上半身そのものを横に逸らす事ができずに、ラティアの小さな純白の翼に直撃した。甲高く短い悲鳴が耳元で響き、ユイは瞬時に振り向いた。

「きゅいつ！ きゅいつ！」

ばたばたと無事な右翼をばたつかせ、動かない左翼をだらりと垂れ下げたままラティアは埃っぽい地面の上で痛みにもがいていた。急いで駆け寄ろうとするユイの足元を、鞭のようにしなる細い雷撃が貫く。

「まだ魔源ヒンジフルが枯れたワケじゃない」

肩越しに振り返ると、すぐに光の球体が目に飛び込んできた。その光の向こう側で、軽蔑を込めた冷たい眼差しが見える。

「さよなら、巫女さま」

光の弾が炸裂したと同時に、ユイの頬を掠めて冷たい風が吹き抜けた。その風が、硬く凍てついた鋭い氷の粒を孕んだラティアの息吹である事に気づいた時には、それは光の弾を一瞬の内に貫いて杖を氷漬けにしてしまっていた。

小さい音を立てながら氷に包まれていく杖を茫然と見下ろしたまま、少年が杖を離すと地面に落ちた杖は全て氷に閉じ込められてしまった。

「バカな」

そう呟くのがやっとだった少年に、ユイの拳を止められる間も無かった。

「ラティア！？ 生きてるよね！ 返事してよ、ねえ！」

少年が崩れ落ちると同時にユイはラティアの方へ駆け酔って、首を自分の方へ向けたままうつ伏せに倒れているラティアの身体を拾い上げた。

白く美しい翼には雷撃の痕が刻まれ、痛々しく黒ずんで血が滲んでいる。すぐに腰に下げていた携帯用の水筒に入れていた水で傷口を洗い、口を苦勞してこじ開けると少量の水を流し込んだ。

（あんまりガタガタしないでヨ……目が回るネ）

「ラティア、大丈夫？」

（あれぐらい大した事ないネ）

瑠璃色の瞳を細く開いたまま、長い首をユイの肩に凭れさせた。ちゃんと脈打っている心臓を確認して心から安堵すると、心の片隅で疑問が芽生えた。

あの息吹は一体？

が、その真相を知る事ができるのは今ではないらしい。ラティアはすぐに目を閉じて、気を失うように眠ってしまった。ユイはそつとラティアを抱え上げて、ジャケットの中に丁寧に小さな身体をしまった。小さく呼吸する温かな存在を感じながら後ろを振り向く。

少年はぴくりとも動かず、その身体の上を鼠が通り過ぎていった。

「完璧な存在か」

ユイはぼつりと呟いて傍らにしゃがみ込んだ。

「そんなもの、求める為だけに存在するようなものなのよ」

氷にヒビが入って、鋭い音が響いて杖が二つに折れた。

「僕の兄さんだったんだ」

シエベリオーズのカウンターの上に頬杖をついて、ぼんやりと店の外の人通りを眺めながらユグと名乗った少年は呟いた。ユイは背中にシエベリオーズの堅い感触を感じながら、気のない返事をした。あの後に魔道士の少年を絢華チエルシアの警備団体に引っ張っていき、彼は逮捕された。後日分かった事だが、家出していた行方不明者だったらしい。

「昔から執拗なまでの完璧主義者でさ、僕達は双子なんだけど全然似てないんだよ。僕自身、たとえ歪でも心だけは真っ直ぐ生きてるつもりだから」

「道を間違えてしまうのが人間なもの。あなたの生き方に賛成ね」

凭れかかっていたカウンターから離れると、ユイはユグの方に向き直った。カウンターの上には石英鹿リッライントの干し肉の包み。

「三百リズット」

「少しはオマケする事も覚えるのね」

しかめっ面でユイが百リズット硬貨を三枚叩きつけると、ユグはにこつと笑った。ユイの肩の上でラティアが翼をめいっばい広げて伸びをすると、左翼に巻きついてきた包帯が解けた。傷口は綺麗に塞がって、元の純白の翼を取り戻している。

「それじゃ」

(散々なネ)

「別にいいじゃない？ 大した騒ぎにはならなかったし」

(楽観的すぎネ！ 少なくともたつくさんの人に見られちゃったのヨ！)

「大丈夫だつて」

小高い丘の上まで辿り着くと、ユイは大きく伸びをして振り向かずにもた歩き始めた。ラティアはしかめっ面のまま、ばたばたと忙しなく純白の翼をはためかせた。

第十一伝 新たな兆し

(涼しいのネ)

チエルシア
絢華の都を出てから真つ直ぐ北西へと、ひたすらに旅を続けてきたユイとラティアはやっと風狼国と玉龍国の国境を越えて、風狼国へと辿り着いた。やや北寄りの方角へ進路を変更し、現在ではその四日後に見えてきた小さな街、陽林ウルスの石畳の散歩道を歩いている。

階段や急な上り坂が続く石畳の道は、両側から鮮やかな暗緑色に艶めく葉をみつしりと生やした木々に挟まれ、遙か頭上から降り注ぐ陽光を遮っては堅そうな地面に木漏れ日を落としていた。緩やかな風が吹き渡って、一つに纏めたユイの淡い金髪を揺らしては遠ざかっていく。

「ホント、素敵な街ね。そんなに大きくないけど落ち着いてて」
チエルシア

「絢華みたいなトコ、ラチは嫌いなネ。こういうトコが一番好きヨ」

大きく欠伸をしながら道行く人々の好奇の視線を感じて、ラティアはわざとらしく折り畳んでいた翼を広げた。見事な純白の翼が広がって、人々は一様に目を丸くする。ユイは少々目立ちたがりなラティアをちらつと見て、快活に笑いながら軽やかに石段を登り始めた。

この石段を登り切って右の道に行けば、また新しい通りに入る。その通りの一番端にある宿屋の部屋を先程取ってきたのだ。

「部屋に帰ったら補充品を確認しなくちゃね」

「ラチのオヤツも買ってくれるのネ？」

「いい子にしてたらね」

瑠璃色の瞳をくりつと丸くして、ラティアはおずおずと翼を畳んだ。それと同時に、首に巻きついた鎖に下がる水晶の飾りが揺れて輝いた。

「全部で二エルトと八百リズツ」

「へっ？ 後八十ブロンあるはずじゃ……」

「たった八十ブロンじゃないか。オマケだよ、オマケ」

豪快に笑いながら体格のいい売り子がユイの肩を叩いた。驚いてラティアが目をぱちくりさせる。ユイは笑って礼を言うと支払いを済ませ、その売り子に手を振りながら紙袋を抱えて店を出た。

(やっぱり、ここ良いトコネ。良い人ばかりヨ)

長い尻尾を揺らしながらユイの肩にちょこんと乗るような格好で、ラティアは器用に両手を使いながら真っ赤な果実を頬張って口元を赤く染めていた。先ほどの売り子に貰ったのである。

「調子のいい事ばっか言っちゃって」

ユイは苦笑しながら、買い換えたばかりの焦げ茶色の編み上げブーツを履いた足で石畳の道を歩き始めた。まばらに人が行き交う石畳の道はどこか朴訥としていて、旅立った故郷を思い出させてくれる。緩やかな風は微かに緑の香りがして、ユイは良い気持ちで蒼い瞳を閉じた。

「おおっと……」

いきなり後ろから誰かにぶつかられてユイは前につんのめった。何とか紙袋を落とす事はなかったものの、しみじみとしていたところを邪魔されて気分は良いとは言えなかった。

「ごめんよ姉ちゃん！」

ユイにぶつかった、まだ幼い男の子は継ぎはぎだらけで拉げている帽子を被り、肩には丸められた新聞がたくさん突っ込まれた肩掛け鞆を下げている。薄い庇を持ち上げたまま、男の子は初めて見るのであるう色髪色瞳シヤナシオンに薄い鳶色の瞳をぱちくりさせると、慌てて肩掛け鞆の中の新聞を一つ引っ掴んでユイに手渡した。

「お金いらないよ！ぶつかっちゃったお礼！」

早口に言うと男の子は照れたように笑って、「号外、号外！」と可愛らしい声で石畳の道の上を走り回り始めた。その声に反応して人々の視線が男の子に集まっていく。

「また狼人狩りろっじんが失敗しちまったのか！情けねえ、清紗シヤンは一体何をやってんだか！」

男の子から新聞を買った男が眉を下げた大声を上げた。他の人々も同じような反応を見せている。

「狼人？」

ユイは怪訝そうに眉を寄せて新聞を広げてみた。ビサリから文字を教えてもらっていたユイはお目当ての記事を見つけると、さっそく文面に目を通し始める。

(清紗^{シンシヤン}? 地図に最近描かれ出した、あんな小さい村に武力が集中するとも思ってるのネ?)
「それにしても狼人って何かしら?」

ユイは新聞の記事にあらかた目を通すと、訝しげに「狼人」と書かれた部分を指差した。どうやら清紗^{シンシヤン}と隣接している山に狼人と呼ばれる怪物が出没し、その討伐にまたもや失敗したという事らしい。ユイは寄せていた眉をふと元の位置に戻して、考えに耽るように口元に手を当てた。次の瞬間、ぱつと蒼い瞳が希望に輝く。

「もしかしたら、風狼の玉龍士と何か関係があるのかも!」

「紺麗^{アルク}山に登るだつてえ? お嬢ちゃん、正気かい?」

きつちり磨き込まれた小綺麗なカウンターの向こう側で、丸い縁の眼鏡をかけた老婦は編み物の手を止めると、透き通ったレンズの奥の薄い灰色の瞳を丸くさせた。白くなってしまったものの、ちゃんと手入れされている髪はくるりとカールしていて、垂れ気味の目尻と相まってとても愛嬌がある。

「ここから遥香^{エトエット}の村に行くには、清紗^{シンシヤン}にあるその山を通った方が近道^{エトエット}って聞いたもので」

「遥香^{エトエット}ねえ、せめて狼人狩りが終わってからの方がいいんじゃないかい?」

「狼人?」

すつとぼけた声でユイがカウンターのお婦に問いかけると、ジャケツトの中でラティアが目を細めた。

(小利口な娘なのネ！ 全く)

刺々しいラティアの声に耳も貸さず、ユイは考え込むお婦の前で表情を崩さない。

「紺麗山アルクに八年ぐらい前から住みついてる怪物なんだと。悪さはしないらしいけどねえ、やつぱり気味が悪いじゃない？ 何回も清紗シメンヤンの警備団体が編成を組んで討伐しようとしてるんだけど」

そこで言葉を切って、お婦はぶるつと身震いした。

「誰も姿を見た事がないらしいのよ。決まって討伐を実行する日は大風が吹いちやって。山奥に行けば行くほど激しくなるもんだから、殆どの人が前に進めないでしょ？ それでも懲りずに進もうとしたのは、狼にやられたり、風にすつぱり身体を切られちまったんだと」
「切られた？ 風に？ それっておかしくありません？」

頬が紅潮して期待が漲っていくのを自分でも感じながら、ユイはカウンターに身を乗り出した。

「確かにおかしいわよねえ。こっちの方じゃ、もしかしたら狼人って怪物なんかじゃなくて玉龍士なんじゃないかって噂が立ってるのよ」

お婦の穏やかな口調には、少し好奇心が混じり込んでいる。

ユイは高まつていた期待が最高潮に達して、身体の底から喜びが湧き出してくるのを強く実感した。頬が真っ赤になって、蒼い瞳に

は希望の光が宿る。

「やっと見つけた……!!」

「え?」

小さいユイの呟きに老婦が顔を上げると、すでに彼女の姿はカウンターの前から離れて、急な造りの幅が狭い階段の上だった。

「ありがとう、おばあさん!」

嬉しそうにそう言って、足取りも軽やかに自分の部屋へと戻っていき、後ろ姿を見送ると老婦はゆっくりと笑った。

「ま、綺麗な髪なこと」

「まさに大当たりね! すっごく幸運かも!」

(まだ玉龍士なんて分かってないのに、はしゃぎすぎネ。それに運テイジヒリアは関係ないのヨ、運命の絆がお互いを引き寄せ合っただけネ)

冷めた声でユイのベッドの上に寝転び、ぱたぱたと翼をはためかせているラティアを気にも留めずに、ユイは喜々としてベッドに勢い良く座り込んだ。硬いスプリングが弾んで、ラティアの身体が一瞬宙に浮く。

迷惑そうにラティアはユイを睨むと、ベッドの向かいにあるタペストリーにちらつと不機嫌そうな目を向けた。首を少し上げたせいで、巻きついた細い鎖が音を立てる。

(アレが風狼なのネ。初めて見るヨ)

麻で作られた質素なタペストリーの中央には、銀色の月を見上げている藍色の毛並みの風狼が織り込まれていた。瞳は月と同じ色の銀色に輝いている。その周りには風を表している白い渦巻き模様、下方には戦いの象徴である番いの剣。

風を創造の神より賜りし聖獣は、静謐な威厳をタペストリーの中でも保ったままだった。壁に掛けられたタペストリーの上では、風を纏った風狼の姿が直に彫り込まれている。

「あの刻印が身体のどこかにあるワケね？」

(そうなのネ。一代一代、刻印が出る場所は決まってるって聞いた事あるヨ。先代が左の二の腕、その前の代は右の首筋とか)

尻尾をユイの細い手首に巻きつけて遊びながら、ラティアは瑠璃色の瞳をくりくりさせた。

「ラティアって結構博識なのね。まだオチビちゃんなのに」
(オチビちゃんとは何ネ！)

むっとした声で言い返されて、はたとユイは以前ラティアに抱いた疑問を思い出した。チエルシア 絢華での一件である。

(どうしたネ?)

瑠璃色の瞳が自分の方を向いて、慌てて目を逸らすとユイはベッドから立ち上がった。

「明日の昼間、出発しよ！早く玉龍士に会ってみたい！」

(八つ裂きにされてもラチ知らないネっ)

第十二伝 清流と狼

「全然風吹いてないね」

傾斜がきつくなってきた獣道を息を弾ませて、額にうつすらと汗を浮かべて登りながらユイは呟いた。足元の緑色に萌えている雑草を踏み分けて、足を一歩ずつ踏み出す毎にごろごろとした礫が転がった堅い地面の感触が、踏み倒された雑草越しに伝わってくる。

(ユイ)、さっきこの場所来たのネ)
「へっ？」

不機嫌そうな中に憂鬱な心持ちを覗かせたラティアの言葉に、ユイは足を止めた。肩の上から自分の横顔を睨む視線に気づいて、白い頬に一筋の汗が伝う。おそろおそろの辺りを見回すと、道標として十字の形に刻みつけておいた痕が無情に目に飛び込んでくる。足元をさわさわと心地よいそよ風が吹いて、雑草達をなびかせた。微かな音さえも、沈黙を破らない二人の間では大きな音となり得ている。

「……………迷っちゃった、かも」
(かも、じゃなくて事実上迷ったのネっ！)

高い声で怒鳴ると、ラティアは派手に翼をはためかせて怒りの感情を表した。ユイの一つに纏められた金髪がラティアの翼に打たれて、優雅に波打つ。それさえも腹立たしくて、ラティアは鼻を鳴らすと尻尾でユイの背中をびしっと叩いた。

(喉乾いたネ！ 水が飲みたいのヨ！)
「お茶ならあるけど？ 温ぬるくなってるけどね」

(聞いてなかったのネ？ ラチがいつてるのは水なのネ！ つめった〜い綺麗な水なのヨっ！)

ばしばしと背中を尻尾で叩かれて、しかめっ面になったユイの耳に何処からかせせらぎの音が響いてきた。

「冷たいものでも飲んで、頭冷やそっか」

(元から冷えてたら、こんなトコで迷子なんかならなかったのネーっ！)

急勾配を縫うように続いている獣道を辿って小高いところまで登ると、下方に小さな谷川が見えた。遠目から見れば細々としていて貧弱ではあったものの、近づいていけばいく程に大きさは増していく。

谷川の近くに降り立つと、ユイは用心深く濡れて光っている岸边に足を踏み入れた。幅はないものの深そうな谷には透明な水が休む事無く流れていて、水面が太陽の光を反射して煌めいていた。

「綺麗……」

呆けたように口を開いて深く澄み渡った流れの前で突っ立っていると、肩に乗っていたラティアが嬉しそうに翼をはためかせて岸边に降り立った。長い首をひょいと伸ばして、開いた口に水を含ませていく。瑠璃色の目が細まると喉が鳴る音がした。

(ん〜！ 冷たいのネ！)

頭をぶるぶる振って小さな雫を水面に飛び散らせると、もう一度口を開く。ユイもラティアの傍らにしゃがんで手袋を外して膝の上に置くと、手を透明な水の中へつけてみた。心地よい冷たさが手を包み込んでいく。

そのまま水を掬って口に運ぶと、きんとした冷たさが広がった。

「あははっ、冷たい！」

（うぎゃっ！ 何するネっ！）

ユイはもう一度水を掬うと、水面に口を突っ込んでいたラティアの頭にかけてやった。驚いて首を竦めたラティアを見て、思わず笑いがこみ上げる。

（何するのヨっ！ 古代の幻族のラチに向かってっ！）

「幻族？」

さっきまでと打って変わってユイは神妙な顔つきになり、眉を動かした。幻族は今から五千年以上も前に滅んだ全ての種族を指す言葉。つまり、この時代に幻族が生きたまま存在する事は有り得ない。

「どういう意味？ 今、“幻族”って言ったよね？」

（うう、ちょ、ちょっとした冗談ネ）

ユイの痛い程の視線にラティアはじりじりと後退りした。瑠璃色の瞳が忙しなく瞬く。

「前っから怪しかったのよね？」

（あっ！ ホラ見るネ、ユイ！ あ・そ・こ！）

慌てた口調で首を右に曲げて、ラティアは右翼をびしっとなる方

向へ向けた。

「話題逸らさないでく・だ・さ・い」

(アレ見てく・だ・さ・い)

だんだんと似た者同士となってきた二人はむっとした顔で睨み合う。が、ラティアが尚も右翼である方向を指し続けると、ユイも仕方なくその方向を向く。

「げっ！」

ぎよっとしてユイは目を見開いた。背の低い雑草の茂みの陰に、まだ小さい子供の狼が倒れている。後ろ脚に赤黒い血が半分固まった状態でこびりついていて、まだ真つ赤な血が傷口から垂れるところが痛々しい。

素早く立ち上がって駆け寄ってみると、まだ息はあった。浅い断続的な荒い息が、食い縛った小さな歯の間から零れ出ている。

「見て、これ」

ユイは険しい顔になって傷口を指差した。ぱっくりと裂けた後ろ脚からは、まだ血が滴っている。てらてらと生々しく光る肉に、虫唾が走った。

「多分、人工の刃を使った畏だよ。他の獣じゃこんなに綺麗な傷口につけられない。それに狼でもまだ子供だもの、威嚇行為で負った傷ならもつと浅いだろうし、襲って捕食するつもりなら逃がすはずないと思うの」

(畏？ 狼はただでさえ仲間意識が強いのに、人間にやられたって気づいたら仕返しされかねないネ)

「狼は頭が良いから大丈夫よ、そんなマネはしないわ」

中に入れていたお茶を捨てて谷川の冷たい水を汲んでくると、ユイは自分の荷物から手頃な布を引っ張り出して引き裂き、片方に水を染み込ませると傷口の周りを拭き取った。僅かに身体が動いて、抵抗するように前脚を動かす。

「きつと狼人狩りが関係してるんだわ。狼達は討伐に邪魔だと思われてるのよ」

（それにしてもヒドイのネ）

ラティアは瑠璃色の目を細めて、ゆっくりと瞬きした。瞳が潤んで零れ落ちそうな程に揺れる。

荒い息を吐く子供の狼の身体を撫でてやると、もう片方の布を膝に置いて、鞆に引っ掛けていた薬草瓶を引っ掻き回した。瓶の中から掌より大きい暗緑色の薬草をやっとこさ引っ張り出すと、ユイは傷口にそれをそつと宛がって、膝の上の布でしっかり縛ってやった。

「良かった！ 何とか大丈夫みたい」

（このコ、どうするネ？）

「ま……脚を綺麗にしてやってから考えよ」

注意深く身体を抱え上げると子供の狼はぴつたりとユイに寄り添って、彼女の小さな肩に顎を乗せた。ラティアが先の表情とは一変して、怪訝そうな顔になる。

（口臭サイアクネ）

「歯なんか磨くワケないでしょ」

そう言いながらユイが一步踏み出すと、何気なく吹いた風が梢頭

を揺らした時、空気が一瞬の内に変わった。

周りの茂みから鋭い殺気がユイの方へと注がれ、微かに低い唸り声が響く。

肌が粟立って、心臓が拍数を跳ね上げる。

「せっかく助けてあげたのに、これじゃあ誘拐犯みたいじゃない」
（だからこんなトコ来たくなかったのネ〜！ 罠の件もあるし、すっごいカリカリしてるのヨ）

声を潜めているものの、茂みに隠れ琥珀色の瞳で二人を睨んでいる狼達は警戒するように、一際強く唸りを上げた。ユイに抱かれた子供の狼はきよるきよると辺りを見回して、鼻をひくつかせている。ユイは目だけを動かして状況を察知すると、唾をごくりと飲み込んだ。額を汗が伝って、焦燥の念が滲み出す。

（ちよつとっ！ 何する気ネっ！？）
「当たり前」

左手で狼の子供をしっかりと支えると、ユイは空いた右手で剣の柄を握った。ラティアの目がぐりつと丸くなる。

「説明する前にやられるのがオチよ、強行突破に決まってんでしょっ！」

（やめるネ〜っ！）

ラティアの制止に耳も貸さず、ユイが抜刀しようとした瞬間。

「誰だ？ お前」

不意に予想外の方向から声が響いた。人間の声だ。

気がつけば狼達の唸り声が止んで、そろそろと茂みから抜け出てきた。先程までの鋭い眼光は消えて、主人の前の従者のように大人しく地面に座り込んでいる。全員が目を伏せているのは、狼の相手に対する服従の証。

どうやら声の主が、この山の狼達の頂点的な存在に立っているのだろう。

ユイは剣の柄から手を離して、子供の狼をゆっくりとした動作で地面に降ろしてやると、さっと後ろを向いた。

「物好きな奴だな、わざわざ治療してやったのか」

暗く陰った山道の入り口で、畏に利用されていたのだろう厚い刃のぶら下がった荒縄を、何本も肩に担いだ少年が皮肉っぽく言い放った。

第十三伝 月と獣臭

「なに、その言い方」

「物好きに物好きって言って何が悪い」

がりがりと頭を掻きながら少年が陰の落ちた場所から出ると、最初に彼の瞳に目があった。灰色と称するには勿体ない、銀色と呼ぶべきその色は、風狼の血を継ぐ一族である風狼族ふうろうぞくの純血にのみ表れる大きな特徴。

ユイはむっとしたまま少年の顔を睨んだ。

はつきり言って期待外れだったのだ。まだ彼が玉龍士だと断定できたワケではないが、それだと思っていた人物は自分より少し年上程度の少年。おまけに初っ端から天邪鬼の断片を覗かせている。

「あなたが狼人って呼ばれてるひと？」

「巷じゃあな。当たり前といや当たり前だ、ガキの頃から狼といえるようなもんだからよ」

ユイの周りの狼達を眺め回すと、少年はもう一度ユイの方を向いた。眠たげな銀色の目が僅かに見開く。彼自身は色瞳シオンであるものの、実際に自分以外の人間は見た事がないらしい。

「玉龍族か。よくもここまで、人買いにやられずに来れたもんだな」

「こっに見えても結構腕は立つんでね！」

「笑わせんな。身体も何も全然成長してねーからだろ？」

無愛想に呟きながら、少年がユイの傍を通り過ぎようとする。

その刹那、額に青筋を浮かべたユイの正拳突きが彼の鳩尾に直撃した。

「んじつ！」

全く予想外の攻撃に、少年は苦悶の表情を浮かべて息を止めた。周りの狼達もびくつと驚いたように身を竦ませる。

ユイはそのまま、二十センチ弱の身長差があるにも関わらず、ぐいつと少年の襟首を掴んだ。ラティアが露骨に怪訝そうな顔になる。

「だれが成長してないですって？」

顔を凄ませたユイの迫力に戦慄が走る。

「んのクソアマ……ホントに人間かテメー。それ以前に女か」

「人間です。ちゃんとした人間ですけど？」

「普通はな、ためらいなく初対面の男に正拳突きを喰らわせる奴は女とは言わん。悪酔い処理係の飲み屋のオヤジだ」

「デリカシーの欠片も無い人に言われたくありません」

本音を一通りぶつけ終わるとユイは渋々手を離れた。少年は何度か咳をして、ユイの足元にいた子供の狼を手慣れた様子で抱き上げた。その拍子に荒縄にぶら下がった刃達が擦れて、耳障りな音を出す。

「畏を外してたの？」

「そんなトコだ」

ぶつきらぼつに言うと、渋面のまま振り返る。

「さっさと山から下りろ。人間は嫌いだ、胸くそ悪い」

「胸くそ悪いって！ さっきから聞いてりゃ、口クな言葉使わない

のね！」

ユイは憤慨して少年に蹴りを入れた。

「いつて！ お前、ここに何しに来てんだ！ 俺に蹴り入れる為か、ああ！？」

「私だつて、あんたみたいなのと言いつ争う為にココに来たワケじゃないつーの！」

二人がギャーギャーと言い争っている最中にも、陽が傾き続けていった。

「あー、腹立つ！ 何でテメーみたいな奴を連れてこなきゃなんねーんだ！」

苛立ちを隠そうともせず小屋の扉を蹴って開けた少年の後ろで、ユイもあまり爽やかではない表情を浮かべていた。言い争いは、陽が暮れて辺りが真っ暗になるまで続いてしまったのだ。

さすがに放っておく事もできなかったのか、仕方なく小屋まで連れてきてくれたのだが、どうもお互いわだかまりを解消できずにいた。当たり前である。

入ってすぐの土間には藁を編んだものが敷かれて、その上に数匹の狼達が横たわっていた。全員落ち着いてはいるものの、各所に包帯が巻かれて血が滲んでいる。

「こんなにやられたのね……」

「ひどい事をしやる。簡単に癒える傷なんかじゃねえっていうの

に

ユイが治療した狼を空いた場所にそつと寝かせると、じきに奥から大人の狼が現れて、その隣に寄り添った。

「お母さん？」

「ああ。三匹産んで二匹は罾の餌食になっちまった。過保護になるのも無理ねえよ」

呟くように言う少年は、それでも羨むように子供の狼を見つめた。表情を見れば、彼の母親がどうなったかは窺い知れる。

「そついえば、まだ名前も聞いてなかったな」

話を変えるように土間を横切りながら少年がそつ言うと、ユイは前屈みの姿勢から立ち上がって蒼い瞳を挑発的に回した。

「人に名前訊く時は自分から言うものよ？」

肩越しに振り返って少年は舌打ちした。

「……タツキだ」

「私はユイ。ま、一晚よろしく」

毒々しい笑顔を浮かべたまま、ユイは心の中で「こいつが風狼の玉龍士だとしても絶対一緒に旅はしない」と堅く心に誓っていた。

「ホントにいいの？」

「どーせあいつ等の面倒を一晩中見なきゃなんねえ。獣臭いなら、自分の毛布使ってくれ」

それだけ言っただけでタツキはすぐに土間に戻ってしまった。取り残されたユイは仕方なく、彼が使っている寝室に入ってドアを閉めた。

空いた窓からは心地よい風が入り込んで、ユイの髪を揺らした。そのまま吸い寄せられるようにベッドに向かうと、そのまま腰を下ろす。ラテアがぱたぱたと翼をはためかせて、枕の上に着地した。ジャケットを脱いでベッドに寝転ぶと、確かに少し獣臭かった。だが耐えられない程でもない。何の愛想も無い安宿の堅いベッドや野宿で過ごしてきたユイにとっては、むしろ心地よかった。

ベッドに寝転んだまま天井を見つめると、ユイはもう枕の上で丸くなっているラテアに問いかけた。

「タツキは、玉龍土なのかな？」

（分かんないネ。けど今晚中に真偽を確かめなきゃいけないヨ）

「それもそうだけど」

ユイは、ぼんやりしたままブーツを脱いだ。寝転んだまま横を向いて髪紐を解く。

窓からまた風が吹き込んで、金色に輝く髪を揺らした。毛布を手繰り寄せると、そのまま気を失うようにユイは眠り込んだ。

土間。

タツキは前の右脚に包帯を巻いた狼の頭を撫でながら、壁に背中を預けた。今日は少しも眠くならない。連日徹夜で狼達の様子を見てきたにも関わらず、目はほとんど冴えていく。

「慣れねえ奴がいるからなあ」

ぼつりと呟いて、タツキは右手をじっと見つめた。
手の甲から掌にかけて、幾重にも包帯を巻いて隠し通してきたもの。

「あいつが……」

そう言いかけた瞬間、閉じた扉を叩く音が聞こえてきた。

第十四伝 月下の幕開け

「月が明るいのねえ……」

深く短い眠りから目覚めたユイは、シャツとキュロットを脱いで下着姿になると身体に毛布を巻きつけて、窓の外の夜天に浮かぶ月を見上げた。乱れた髪を手櫛で内側から整えながら、衣擦れの音を立てて膝を抱える。

野宿している時は、一層月を見るのが物悲しかった。独りを何よりも感じさせられる、明るく冷たい白銀の光に照らされる度に、ひどく寂しい思いをした。早く玉龍士に会いたいと何度も願ってきた。

「なんで嬉しくないのかなあ」

ぽつりと独りごちた瞬間、突風が黒々とした木々の梢を大きく揺らした。

「一体何があったの？」

ユイが服装を整えて寢室を飛び出ると、土間にはたくさんの狼達があひしめいていた。怪我を負った狼もよたよたと立ち上がり、若い者に後ろから押ししてもらいながらも戸口へと向かっている。子ども達も大人達の足元を縫いながら、外へ出ようとしていた。

ユイは髪を手早く束ねると、自分の前を通り過ぎようとした一匹の若い狼を呼び止めた。琥珀色の瞳が真っ直ぐユイの蒼い瞳を捉えて、低く唸る。

(また狼人狩りが始まったのネ！)

「もう！？ 再編成や武器を整えるにしても、こんなに早く出来るワケ？」

ラティアの声にユイが過敏に反応すると、狼はまた低く唸った。

尾でしゃがんでいるユイの腕を叩き、裏口の方へと首を振る。怪我人や老人、子どもは裏口から、元気な者達は表の入り口から外に出ているらしい。

(分かんないのネ。ただ、さっさと面倒事を片づけておきたい事に変わりはないヨ。早くに手を打とうとしてるのは間違いないネ)

「そんな……」

絶句したユイは、しかしすぐに立ち上がると土間をぐるりと見回した。タツキの姿が無い。間髪入れずに尾でユイの腕を叩いていた狼が、キュロットの裾を引っ張った。

(あの男の子の事なら心配いらないうって言ってるヨ。だけど)

ラティアの瑠璃色の瞳がきろっと動く。

(ユイを避難させろって、その男の子から言われてるみたいネ。ちよっと危ないのかも)

「危ない？」

裾を破られてはたまらないのでユイも狼達の群れに入り、裏口へと急ぐ。狭い通路はたくさん狼達がひしめき合って、川のように動いていた。

(山奥に行くみたいヨ。そこなら安心みたい)

「くそ」

夜の帳の下、山の頂上にそびえ立つ巨大な樹木が落とす濃い陰の中でタツキは悪態をついた。眼下で突風に薙がれている黒く塗り潰された梢の間から、ちらちらと朱色の灯りが見え隠れしている。その灯りは数を増し、確実に山の奥へ奥へと歩を進めていく。

齒軋りをして右手を強く握る。緩んだ包帯が掌からずりりと垂れ下がると、風の勢いが一層増した。危なげに揺れていた灯りが一斉に消える。耳を澄ませば遙か下の罵声と悲鳴が聞こえてきそうだった。

今夜は、傍らには誰もいない。狼達をこれ以上傷つけたくなかった、彼が下した決断による結果だ。

「今夜だ」

ぼつりと呟いてタツキは息を吐いた。夜天の彼方に輝く月が陰を一層狭めて、彼の銀色の瞳を映し出す。

「今夜で、全てが終わる」

第十五伝 狩人の眼

「すっごい風！」

裏口から小屋の外に出たユイの身体に、荒れ狂う疾風が叩きつけた。闇夜に浮き立つ金色の髪が唸りを上げる風に巻き上げられて、炎が揺らぐようになびいている。唸りを上げて木の葉を乗せた夜風は、留まる事無く東から西の方角へと吹きつけていた。

狼達の群れは裏口から続く、山奥への細い獣道を辿っていた。ぞろぞろと列を成して山奥へと入っていく狼達に加わってユイも歩き出した。歩を進めながら、後ろ髪を引かれる思いでゆっくりと振り向く。

「タツキ……」

小さな呟きは、一際強く吹き抜けた疾風に掻き消された。

「さて」

肩を上下させながら静かに荒い息をつくとき、タツキは関節が白むほど握り締めていた右手から力を抜いた。高まっていた心臓の鼓動が、ゆっくりと静まっていく。渦を巻く疾風が雲を払いのけて、月が煌々と夜空を照らし出していた。

下方に揺れる灯りは、さほど遠くない距離にまで狭まっていた。タツキのこめかみを一筋汗が伝う。銀色の目が遙か後方の辿っているであろう道が続く方角へと向いた。 狼達

この場所で狼達が避難するまでの時間稼ぎを始めてから、結構な

時間が経った。ただ、もう少し時間は必要なようだ。夜が明けるまでは、まだたくさん時間がある。

「俺の力が持てばいいがな」

右手を貫く焼けつくような痛みが神経を過敏にさせていく。脂ぎった汗が掌に滲んだ。目を閉じて右手に神経を集中させると、じりじりと痛みが皮膚を焼いた。

「うぐ……」

低く唸ると、タツキの頭上を疾風が渦巻いた。

「風が弱くなってる」

ユイは脚を怪我した子どもを三匹抱えて獣道を登りながら、風が弱くなってきた事に気づいた。振り返ると最後尾にあたるユイ達も、結構な距離まで来ていた。先頭はもつと先まで歩を進めているだろう。

（あの男の子は来ないのネ？）

「分からない……一人で喰い止めてるのよ、きつと」

ユイは脚をぶらつかせている子どもを狼達を抱え直しながら、タツキが“風狼の玉籠士”である事を悟っていた。風を纏い、藍の毛並みを持つ、月に愛された戦いの神。脈々と古来より流れ続ける風神の血が、彼の身体を巡っているのだ。

探し求めてきた玉龍士の一人。それでも彼には。
ここを離れられない理由がある。この狼達を放って共に旅に出て
くれるとは思えない。

重くなる心を感じながら、ユイが目の前の垂れ下がった枝を押し上
げるとラティアが瑠璃色の瞳を丸くした。

（ユイ、なんかおかしいヨ）

「何が？」

（狼達、仲間の数が何匹か足りないって言い合ってるネ）

「おおい！ 見つけたぞお！」

「狼人のガキだ！ 木の根元にいるぞ！」

揺れる松明の橙色の灯りが、僅かに見開いたタツキの銀色の瞳を
照らした。汗が身体中を伝って、強い疲労感が押し掛かってくる。
こんなに能力ちからを使ったのは初めてだった。吐く息が震えて、心臓が
脈打つ度に右手が痛んだ。

自分の周りを囲むように人がどんどん増えていく。背が高く屈
強な男達がじろじろと、物珍しそうな目線を飛ばしてきた。無性に
舌打ちしたくなってくる。

「手こずったな、全く」

タツキの周りを囲んでいた男達の中から、がっしりとした筋肉質
の男が歩み出てきた。黒い髪には白いものがちらほらと混じり、目
尻には浅く皺が刻まれている。他の男達より年を取っているものの、

彼は年相応の威厳を湛えていた。

「死んでもらうぞ、人狼小僧」

古臭く錆ついた刀身を鞘から引き抜きながら、男は鋭い視線を夕ツキへと向けた。人を殺した罪人か、人を喰い殺す獣を見るような目つきで。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3667g/>

玉龍史

2011年5月1日20時13分発行